

木更津市^{かみ なぬし が やつ}上名主ヶ谷窯跡確認調査報告書

昭和 63 年 度

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県内における生産遺跡のうち、埴輪や須恵器、それに瓦の窯跡は三十数箇所存在することが確認されています。

これらは、古代房総の窯業技術を知るために重要であるばかりか、生産物とその供給先との関係を知る上で大変重要な遺跡ですが、今日まで発掘調査されその実態が把握された例は少なく、今後の研究課題となっております。

窯跡は台地の山裾部分の傾斜を利用して立地するため、その存在について明確でないこともあり、開発による危機にさらされております。

このため、千葉県教育委員会では昭和58年から60年にかけて県内所在の生産遺跡分布調査を実施し、今後の保護、活用を図るための資料を得ております。この成果を踏まえて窯業遺跡について、その規模や性格等を明らかにするため、昭和62年度から国の補助金を得て確認調査を実施しています。

本年度は、木更津市に所在する上名主ヶ谷窯跡の調査を実施し、窯跡6基が所在することを確認しました。確認したのは須恵器窯跡3基、瓦窯跡2基それに須恵器と瓦を同時焼成した窯跡1基ですが、すべて同時に操業していたのではなく、時期の隔たりを認めることができます。また、生産物の供給先についても推定が可能であり、矢那川流域を中心とする地域の歴史を解明する上で重要な資料となるものと考えております。

このたび、発掘調査の成果について調査報告書としてまとめ刊行する運びとなりました。この報告書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用のために広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに当たり、文化庁をはじめ、土地所有者の皆様、木更津市教育委員会、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターなどの関係者に心からお礼申し上げます。

平成元年3月

千葉県教育庁文化課長
竹内 一雄

例 言

1. 本書は、窯業遺跡発掘調査の第2年次として実施した千葉県木更津市矢那字名主ヶ谷1,000他に所在する上名主ヶ谷窯跡（遺跡コード206-001）の確認調査報告である。
2. 調査は、国庫補助金を得て、千葉県教育委員会が財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査期間は、昭和63年10月13日から11月11日、調査総面積は300m²である。なお、遺跡周辺の地形図（500分の1）作成は業者委託で実施した。
4. 調査及び本書の作成・編集は、研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信の指導のもとに、班長 佐久間豊が担当した。なお、調査研究員 小林信一からは多大な協力を得た。
5. 現地調査にあたっては、土地所有者の石井清氏・石井てい氏からは私有地の借用を御快諾いただくとともに、石井嘉夫氏・石井一夫氏からはマイクロバス等の駐車場の提供等多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
6. 現地調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた。（アイウエオ順・敬称略）

木更津市教育委員会・國學院大学考古学研究室・浅野雅則・穴澤義功・石田広美・倉田義広・杉江敬・田所真・英太郎・水口由紀子・宮本敬一・山本哲也・吉田恵二

凡 例

1. 本報告書で使用した網掛けの種類およびそれぞれの特徴は下記のとおりである。



第3図の須恵器を主体として含む灰原



第3図で須恵器・瓦ともに含む灰原

平面図の $\frac{1}{60}$ の窯壁部については、窯壁色調の違いを以下のとおりに明示した。



青灰色



赤褐色

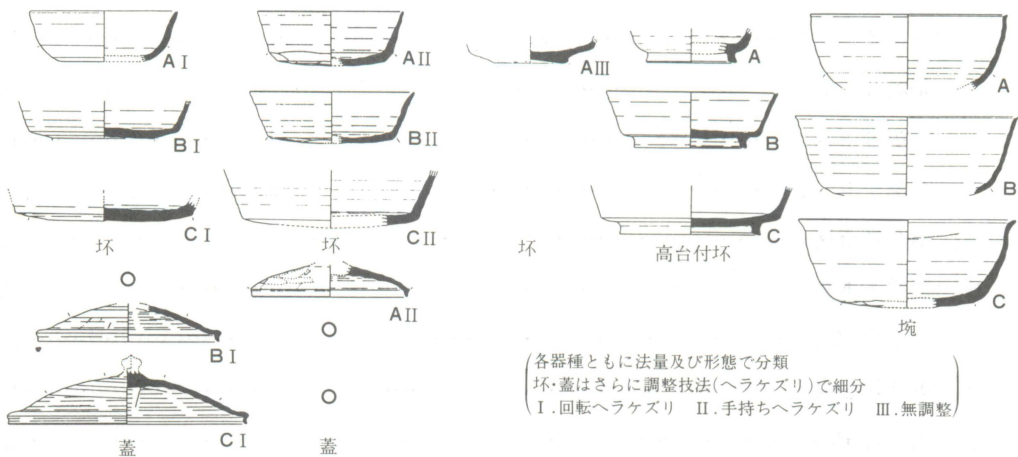


暗赤褐色



断面及び平面図 $\frac{1}{60}$ の窯体。

2. 土器の型式分類は、以下のとおりとする。皿・短頸壺・甕は出土量が少ないので除外した。



3. 瓦は便宜的に、以下により分類した。

平瓦は、凸面の縄タタキの本数から分け、一定幅内に本数が多い順にA・B・C・Dとした。なお、すべて一枚作りである。

丸瓦は、凸面に縄タタキが残るものBと、そうでないものAに分けた。

4. 遺物の番号は、はじめに窯の号名を記し、そのあとに挿図で使用した番号をつけて、遺物番号とした。遺物写真もその番号で表記した。なお、灰原内から出土したものについては「灰」、灰原直上から出土したものは「直」、表土から出土したものは「表」と記した。

5. 遺物の写真は、土器を $\frac{1}{2}$ 、瓦は $\frac{1}{4}$ に統一した。

ただし、それ以外のものについては写真中に表記した。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
I. 序説	1
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 上名主ヶ谷窯跡調査研究の沿革	3
II. 調査経過	7
1. 調査区の設定	7
2. 調査の経過	7
III. 各調査区の調査	10
1. 第1調査区	10
(1)第1トレンチ・第2トレンチ	10
(2)第3トレンチ	10
(3)第4トレンチ	10
(4)第5トレンチ	10
(5)第6トレンチ	10
(6)第7トレンチ	10
2. 第2調査区	11
IV. 検出遺構・遺物	12
1. 第1号窯跡	12
2. 第2号窯跡	15
3. 第5号窯跡	20
4. 第4号窯跡	24
5. 第3号窯跡	25
6. 第6号窯跡	28
7. 灰原内出土の須恵器	29
8. 灰原直上(表土)出土の須恵器	29
9. 表土出土の須恵器	33
V. まとめ	35
1. 各窯跡の変遷	35
2. 奈良時代の須恵器生産について	36

3. 花山遺跡出土の本窯跡産須恵器・瓦の検討	36
4. 結語	37

表 目 次

第1表	第1号窯跡出土瓦観察表	15
第2表	第2号窯跡出土須恵器（上）・瓦（下）観察表	20
第3表	第5号窯跡出土須恵器（上）・瓦（下）観察表	23
第4表	第4号窯跡出土須恵器観察表	25
第5表	第3号窯跡出土須恵器（上）・瓦（下）観察表	28
第6表	第6号窯跡出土須恵器観察表	29
第7表	灰原内出土須恵器観察表	31
第8表	灰原直上出土須恵器観察表	33
第9表	表土出土須恵器観察表	34

挿 図 目 次

第1図	上名主ヶ谷窯跡の位置と周辺の関連遺跡	2
第2図	上名主ヶ谷窯跡周辺地形及び調査区位置図	5・6
第3図	第1調査区地形測量図	8
第4図	第5・6トレンチ土層断面図	9
第5図	第1調査区各窯跡の位置と現況実測図	11
第6図	第1号窯跡平面図及び断面図	13
第7図	第1号窯跡出土の瓦	14
第8図	第2・4・5号窯跡平面図及び断面図（1）	16
第9図	第2・4・5号窯跡平面図及び断面図（2）	17
第10図	第2号窯跡出土の須恵器・瓦（1）	18
第11図	第2号窯跡出土の須恵器・瓦（2）	19
第12図	第5号窯跡出土の須恵器	21
第13図	第5号窯跡出土の瓦	22
第14図	第4号窯跡出土の須恵器	24
第15図	第3・6号窯跡平面図及び断面図	26
第16図	第3号窯跡出土の須恵器・瓦	27

第17図	第6号窯跡窯内出土の瓦	29
第18図	灰原内出土の須恵器	30
第19図	灰原直上(表土)出土の須恵器	32
第20図	表土出土の須恵器	34

図版目次

図版1	航空写真	上名主ヶ谷窯跡と周辺の地形
図版2	遺構	1. 遺構確認状況(南西から) 2. 遺構確認状況(南東から)
図版3	遺構	1. 第1調査区調査前(南西から) 2. 第1トレンチ(西から) 3. 第2トレンチ(南から)
図版4	遺構	1. 第3トレンチ(東から) 2. 第5トレンチ(南から) 3. 第5トレンチ西壁土層断面(南東から)
図版5	遺構	1. 第6トレンチ(南から) 2. 第7トレンチ(西から) 3. 第2調査区(北から)
図版6	遺構	1. 第1号窯跡確認状況(南から) 2. 第2・4・5号窯跡確認状況 3. 第3・6号窯跡確認状況(南から) (南から)
図版7	遺構	1. 第1号窯跡燃烧部(南から) 2. 第1号窯跡遺物出土状況 3. 第2号窯跡試掘坑土層断面(南から) (南から)
図版8	遺構	1. 第2号窯跡燃烧部(南から) 2. 第2号窯跡燃烧部及び第5号窯 跡灰原内土坑(西から) 3. 第2号窯跡試掘坑遺物出土状況(南から)
図版9	遺構	1. 第4号窯跡烧成部(南から) 2. 第3・6号窯跡(南から) 3. 第3・6号窯跡土層断面(南西から)
図版10	遺物	
図版11	遺物	
図版12	遺物	
図版13	遺物	
図版14	遺物	

I. 序 説

1. 遺跡の位置と環境 (第1図, 図版1)

千葉県南西部は、東京湾に沿って、北から市原市・袖ヶ浦町・木更津市・君津市と続いている。また国道16号線が海岸線沿い、国道297号と県道千葉鴨川線が南北に走り、東関東自動車道木更津線・東京湾横断道路の建設も計画され、近年開発の著しい地域として注目されている。

この一帯は、地形的には、海岸線から約12~13kmのところを北東から南西方向に標高100m以上のラインが走り、これより南が丘陵地、北は台地となっている。台地地域は、北より市原台地、袖ヶ浦台地、木更津台地と呼称されている。このうちの木更津台地は、小櫃川左岸一帯、矢那川、烏田川流域に所在する台地群であり、上名主ヶ谷窯跡は、東京湾に注ぐ河口より約7km入った矢那川中流右岸の台地上に立地する。この矢那川は、木更津丘陵に源を発し、丘陵西部を北西流して、樹枝状の水系をつくり、谷密度も比較的高く、本窯跡も矢那川の小支流が形成した支谷にほぼ南面した傾斜角約25度の台地斜面に位置している。標高は、焚口部で60m前後を測る。

窯跡周辺の地質は、下位から清川部層、上岩橋部層・木下部層 (以上成田層)、下末吉ローム層、武蔵野ローム層、立川ローム層 (関東ローム層) となっている。清川部層は、上下二層に分けられる。下部は砂礫または粗粒砂、上部は砂及びシルトから構成され、貝化石を含んでいる地点もある。上岩橋部層と木下部層は、この地域では区別することができない。細粒・中粒・粗粒砂からなり、粘土や礫を挟むこともある。台地上に数mの厚さで堆積しており、一部には貝化石も含まれている地域がある。上名主ヶ谷窯跡の各窯が掘られているのは、この層準である⁽¹⁾。

こういった地形・地質をもつ矢那川流域には、200ヶ所近い遺跡が知られているが、発掘調査が実施され、かつ上名主ヶ谷窯跡と同時期の遺物を出土したものは花山遺跡⁽²⁾のみとあってよい。花山遺跡からは、本窯跡産の須恵器・瓦がかなり出土しており、この点については第V章まとめて論じたい。

周辺で、他の古窯跡と製品の主な供給先である寺院跡について概観すると、上名主ヶ谷窯跡と同じ旧望陀郡では、郡名寺院と考えられる上総大寺廃寺⁽³⁾と大久保牛ヶ作瓦窯跡⁽⁴⁾、旧周准郡では郡名寺院と考えられる九十九坊廃寺⁽⁵⁾と大鷲瓦窯跡⁽⁶⁾を挙げることができる。大久保牛ヶ作瓦窯跡は九十九坊廃寺、大鷲瓦窯跡は上総大寺廃寺を主体として一部は九十九坊廃寺へ供給したと推定されている。上名主ヶ谷窯跡製品の供給先について詳細は後述するが、一部は九十九坊廃寺⁽⁷⁾に供給されており一見「郡」を無視したような複雑な供給関係については、律令体制下における郡段階の寺院建立の背景や窯業生産の実態を解明する重要な糸口になるものであり、詳細に検討する必要があると考えている。



第1図 上名主ヶ谷寨跡の位置と周辺の関連遺跡 (国土地理院発行)

2. 上名主ヶ谷窯跡調査研究の沿革

註(8)

上名主ヶ谷窯跡は、比較的最近に発見された古窯跡であり、その経緯は古代第49・50合併号で詳細に記されている。それによれば、昭和38年春に千葉大学学生小川宏一が、「友人とかねてからの東京湾東岸一帯ことに君津郡、木更津市周辺の遺跡の分布調査中、本遺跡を確認」している。さらに、発見の契機が宅地に地目変更する工事作業中であることから、緊急な対応が必要となり、早速早稲田大学滝口宏に連絡がなされ、県の平野元三郎とも協議の上、発掘調査が実施されることになったという。この調査結果については、「木更津矢那瓦窯址」として前述の古代第49・50合併号で、概要が報告されている。小川宏一は、さらに詳細に周辺の分布調査を実施して、古い林道によって一部削平された今回調査の古窯跡を発見している。この段階で、大川清は発掘調査が実施された瓦窯跡を「矢那1号窯址」、今回調査のものを「矢那南窯址」と命名している。両窯跡の位置関係は、「矢那南窯址」が「矢那1号窯址」の東南100mである。小川宏一の分布調査段階では、「矢那南窯址」の性格は不明であったが、大川清が「矢那1号窯址」を発掘調査した際に、「矢那南窯址」を中心として遺物の表面採集がなされたようで、報文中では須恵器窯と断定されている。

「矢那1号窯址」については、ほぼ完掘されており、以下の点が明らかにされている。

- (1) 三次にわたる窯の構築が確認され、第一次窯は地下式無階有段窖窯、第二次窯は地下式無階無段窖窯、第三次窯が半地下式無階無段窖窯であること。
- (2) 平瓦、丸瓦に隅切が多く、供給先には六角円堂や八角円堂といった建築物が想定されること。
- (3) 築窯技術・造瓦技法などより、奈良時代末から平安時代にかけて操業がなされたこと。
- (4) 平瓦は凸面型一枚作りである。須恵器は坏が一点のみ第二次窯の焚口寄りの丸瓦敷段の右端下部から出土している。この坏は、輸送の途中で紛失してしまったとされているが、形態は丸底で口縁部がほぼ直立しているという。なお、推定ではあるが、今回の調査で第4号窯跡より出土した碗（第12図5）と同類のものを考えている。
- (5) この瓦窯跡の近接左右には他の窯の存在は認められず、本跡のみで群を構成している。

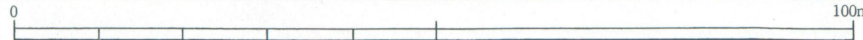
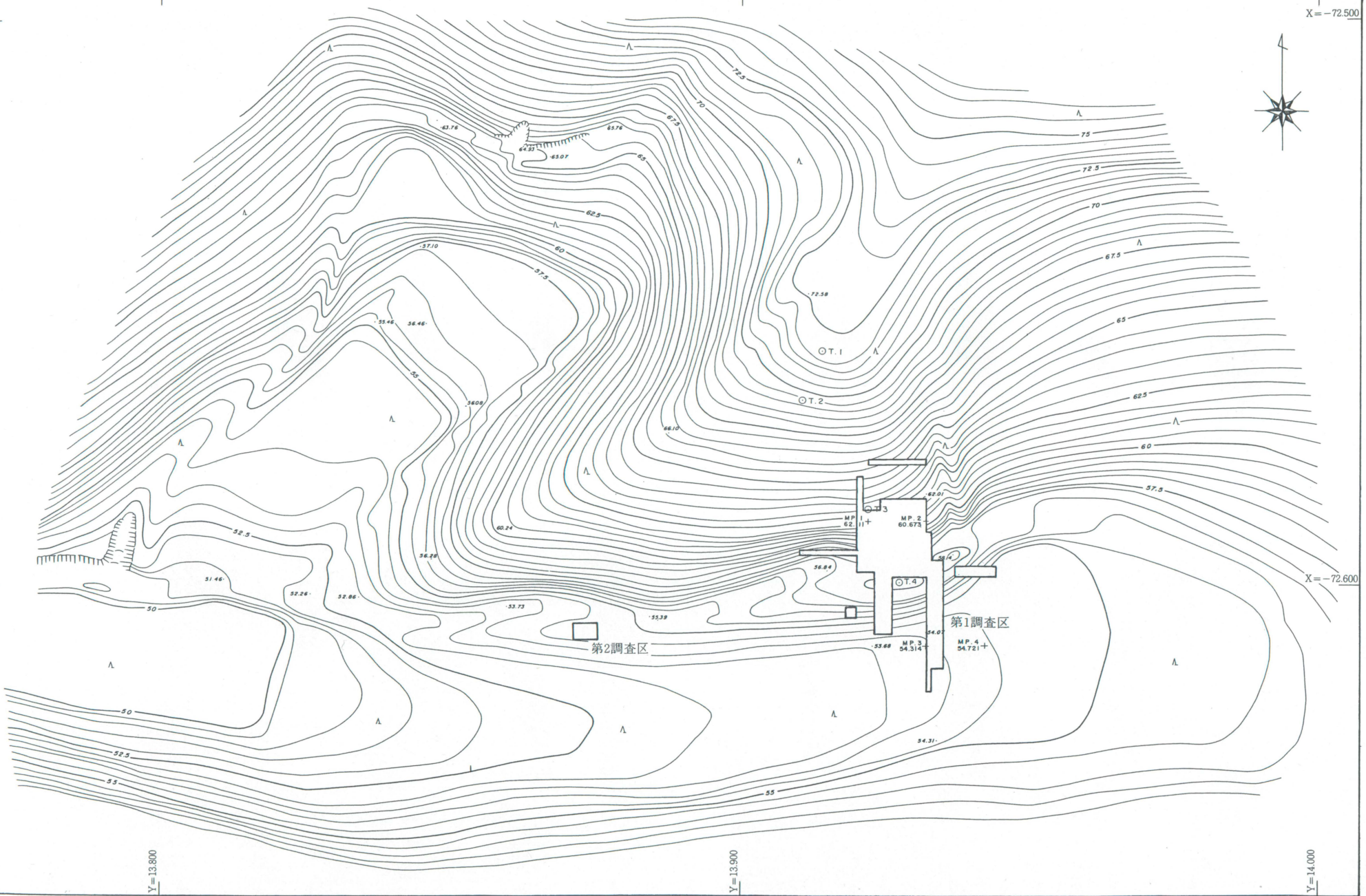
以上の成果は、特に改造による窯構造の変遷が明瞭に捉えられる好例として注目されているが、具体的な供給先については現在に至るまで明確にされていない。したがって、「矢那南窯址」も含めた本窯跡の操業開始の背景や性格及び実年代については、ほとんど論及されていない訳であるが、いくつか参考となるものがあるので取り上げてみたい。その前に、本窯跡の名称について、かなりの混乱がみられるので、整理しておく。

大川 清	・1967 ^{註(10)}	矢那1号窯址	矢那南窯址
大川 清	・1972 ^{註(11)}	同 上	同 上
大岩好昭他	・1978 ^{註(12)}	上名主ヶ谷第1瓦窯跡	上名主ヶ谷第2瓦窯跡

須田 勉	・1983 ^{註(13)}	木更津市矢那瓦窯跡	ナシ
佐久間豊他	・1983 ^{註(14)}	ナシ	上名主ヶ谷第2瓦窯跡
須田 勉他	・1986 ^{註(15)}	上名主ヶ谷瓦窯跡	同 上
佐久間豊	・1986 ^{註(16)}	ナシ	木更津市矢那窯址群
笹生 衛	・1987 ^{註(17)}	ナシ	木更津市・名主ヶ谷窯
白井久美子他	・1987 ^{註(18)}	上名主ヶ谷第1窯跡群	上名主ヶ谷第2窯跡群
平野雅之	・1988 ^{註(19)}	上名主ヶ谷窯跡群	?

となっている。どの名称が一番適切かは一概に決定することはできないが、本窯跡は例言にも示したように、木更津市矢那字名主ヶ谷に所在している。「上名主ヶ谷」という字名は、確かに存在するが、「名主ヶ谷」の南側一帯の字名であり、本窯跡の名称には明らかに不適格である。残るのは、「矢那」と「名主ヶ谷」であるが、今後字上名主ヶ谷や字中名主ヶ谷、字松作から窯跡が発見される可能性が皆無ではないこと、最初の報告で「矢那」が使用されていることなどから、「矢那」が最も適切と考える。なお、大川清は昭和38年に調査を実施した窯を「1号窯」と名付け、今回調査した地点を「南」としているが、「1号窯」周辺で他の窯が発見される可能性もあるので、この地点を「北」とし、今後それぞれを、矢那北窯跡、矢那南窯跡と呼称し、総称を矢那窯跡群とすることを提唱したい。ただし、本報告書名は、事業の性格もあるので、「上名主ヶ谷窯跡」とするが、以下の研究の沿革及びまとめでは記述の便宜上上述の名称を使用したい。

さて、矢那窯跡群の操業年代等について、大川清に続いて取り上げたのが須田勉であり、矢那北窯跡1号窯の築窯を「女瓦の製法が凸面型一枚造りによる」^{註(20)}ことから八世紀後半としている。矢那南窯跡については、佐久間・豊巻・笹生が「表面採集の結果、かなり大量の須恵器が瓦類と共に」見つかったことから、瓦陶兼業窯の可能性が強いことを指摘し、操業時期は「表採資料が永田・不入窯のものと型式的に同一であることから、8世紀第3四半期頃」に比定している。また、「窯数については、2基しか確認されていないが、周辺を踏査した結果、それほど基数が増える可能性もなく、郡司階層による小規模な操業」^{註(21)}を予想している。他で実年代を示しているものとしては、いずれも矢那南窯跡だが、拙稿や千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書^{註(23)}では8世紀後半、「房総における歴史時代土器の研究」のシンポジウムにおけるコメントで、笹生衛が「8世紀第3四半期頃に、永田・不入窯の技法を導入する形で、瓦陶兼業窯として創業している」と論じている。以上のように、両窯跡ともに操業年代については8世紀第3四半期ないしは後半とほぼ統一されているが、説得性のある形での論議はなされていないのが現状である。供給先について論じたものは、矢那南窯跡から採集した瓦との比較検討から、一部が花山遺跡に供給されていることが指摘されているのみである。^{註(24)}



第2図 上名主ヶ谷窯跡周辺地形及び調査区位置図

II. 調査経過

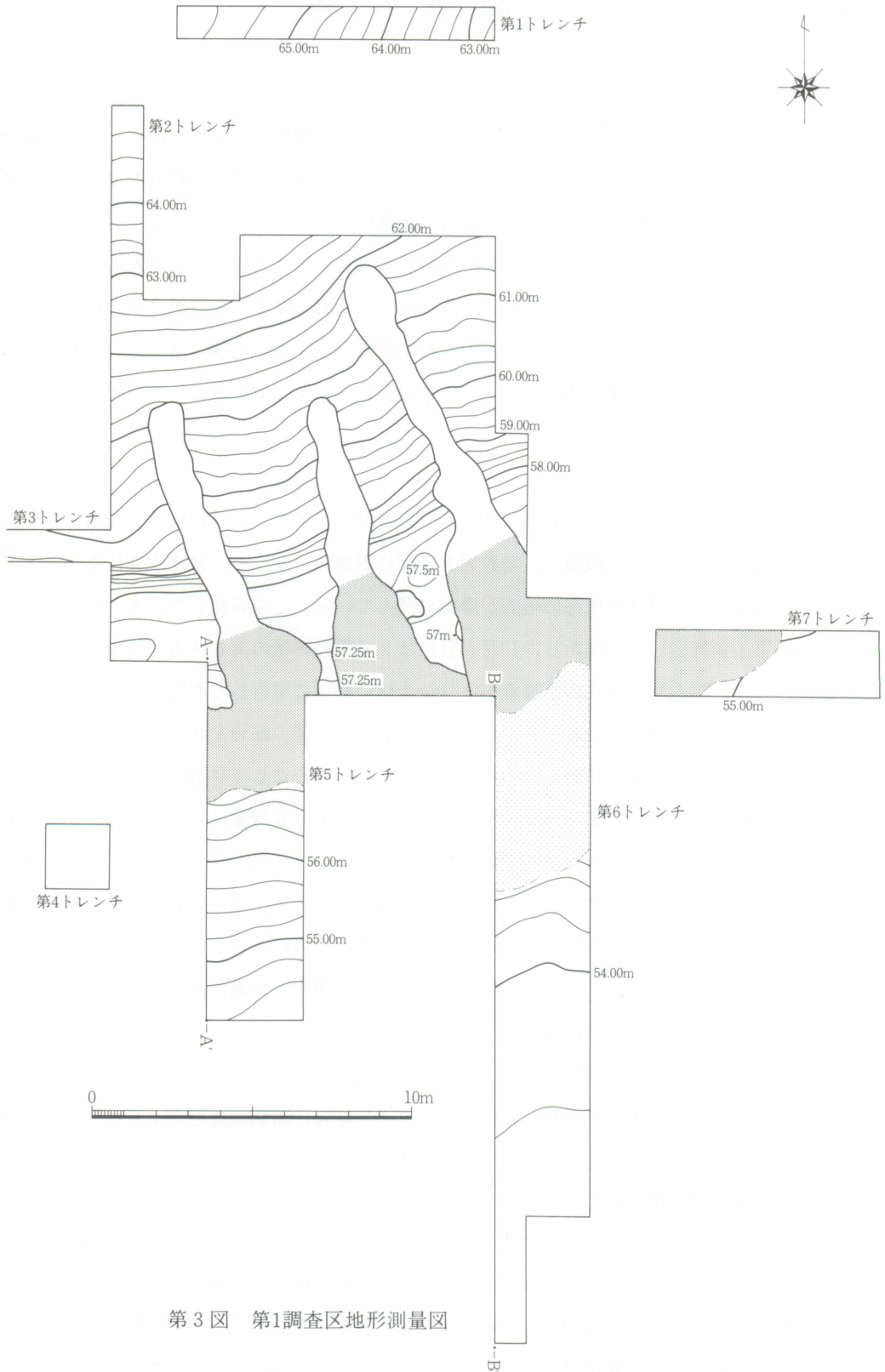
1. 調査区の設定

現地は、雑木が繁茂していたため、調査着手前に伐採を実施した。これと併行して、測量会社に委託して、発掘区設定のための基準点測量を行った。窯跡及び周辺の地形測量は、発掘調査と併行して実施した(第2図)。発掘区は、公共座標にあわせて設定した。第1調査区は、すでに明らかになった窯跡を中心にして、窯跡本体部分については全面を、窯跡周辺は幅1mのトレンチ、灰原部分は幅2～3mのトレンチを設定して、表土除去した。第2調査区は、第1調査区の西方約50mの林道崖面に、覆土に焼土粒を混入している土坑状の落ち込みが確認されたので、その地点を中心に4×3mのトレンチを設定した。第1調査区のトレンチ名は第3図に示してある。

2. 調査の経過

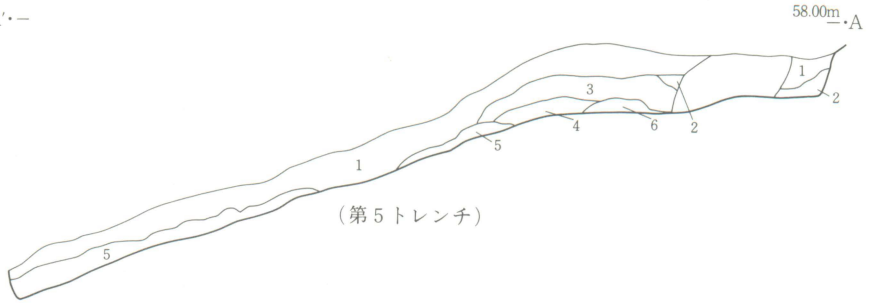
10月1日より準備を開始、10月12日にテント等の設営を完了し、10月13日より現地作業を開始した。伐採がほぼ終了した段階で、地表面を詳細に観察したところ、林道崖面に露出していた窯壁より推定された窯体焼成部の地表が溝状に窪んでいることを確認した。表土除去作業は、この地区(第1調査区)より開始し、10月14日には3ヶ所の溝状の落ち込みを検出した。続いて林道部の表土を除去し、現在の水道管がトレンチ状に林道に平行して埋設されているのを確認し、ただちに覆土を除去したところ、埋設坑は各窯のほぼ焚口部分を切断していることが判明した。この埋設坑の壁面を精査した結果、各窯は焚口を中心にして林道によってかなりの削平を受けているが1号窯は単独で、2号窯と5号窯、3号窯と6号窯は各々切り合い関係を有していることが明らかとなった。4号窯は、林道の南端の2・5号と3・6号窯の中間の位置で、焼成部のみを僅かに残存する形で検出された。10月17日より灰原を確認する為、林道の南側にトレンチを設定し、表土を除去した結果、灰原範囲の全容が明らかとなった。ただし、1号窯の灰原を除いて、各窯跡の灰原は重複しており、出土遺物の帰属は大半が不明であった。10月26日より11月2日にかけて、第1～4、7トレンチ及び第2調査区の調査を実施したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。

10月26日より各窯跡の本格的な精査を開始した。1号窯は、遺構確認面のエレベーション・焚口断面図・灰原の縦断面図を作成し、さらに窯構造の解明を目的に焼成部に試掘坑を設定した。2・5号窯も遺構確認面のエレベーション・焚口断面図を作成し、やはり2基の窯の重複関係を明らかにすることを目的に、焼成部試掘坑を設定した。4号窯は焼成部の一部しか残存していないため、縦断面図を作成後ほぼ全掘した。3・6号窯は、2基がどのように重複しているか不明であったので、縦断面図と3号窯の焚口と灰原において2ヶ所の横断面図を作成した。さらに2・5及び4号窯灰原との関係を明らかにするために、灰原の縦断面図を作成した。

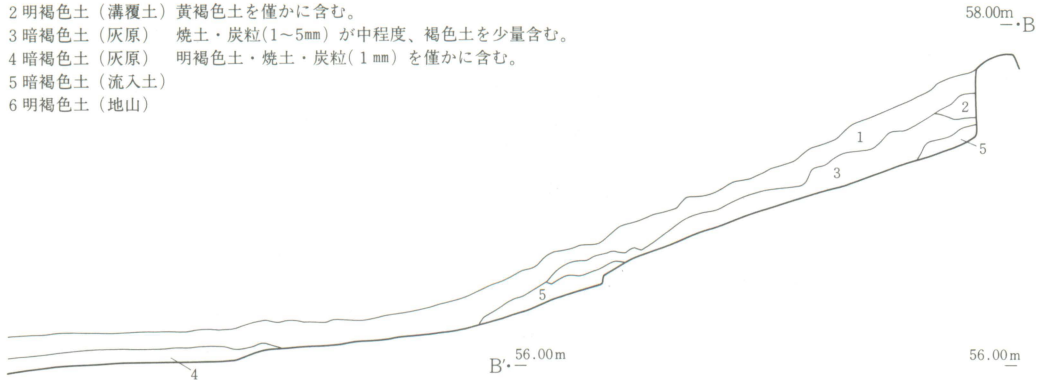


第3図 第1調査区地形測量図

A'-



- 1 褐色土 (表土) 焼土粒(1mm)を僅かに含む。
- 2 明褐色土 (溝覆土) 黄褐色土を僅かに含む。
- 3 暗褐色土 (灰原) 焼土・炭粒(1~5mm)が中程度、褐色土を少量含む。
- 4 暗褐色土 (灰原) 明褐色土・焼土・炭粒(1mm)を僅かに含む。
- 5 暗褐色土 (流入土)
- 6 明褐色土 (地山)



- 1 褐色土 (表土) 焼土粒(1mm)を僅かに含む。
- 2 黒褐色土 (灰原) 焼土粒(1~10mm)を多量に含む。
第3号窯跡灰原
- 3 暗褐色土 (灰原) 焼土粒(1~10mm)を多量、
窯壁片を僅かに含む。
第2・4・5・6号窯跡灰原
- 4 暗褐色土 (流入土) 焼土粒(1~2mm)を僅かに含む。
- 5 明褐色土 (地山)

(第6トレンチ)



第4図 第5・6トレンチ土層断面図

その後、全体の実測図を作成し、写真撮影・遺物取り上げを適宜実施して、11月9日より、作業が完了したところから随時埋戻し、11月11日にテント等の撤去や器材の搬出を行い、現地における調査を終了した。なお、埋戻し作業は急斜面のため一部難行して、その部分については杭・貫板・土納袋を使用して、土留めを行った。

整理作業は、11月12日より図面整理とともに水洗から開始した。11月15日以降、注記・復元も開始して、基礎整理は11月30日に終了した。11月17日より遺物実測、拓本、トレース、写真撮影、表・挿図・図版作成を順次実施して、12月28日に原稿執筆を完了した。

III. 各調査区の調査

1. 第1調査区

検出された各窯の概要については、次章で記すこととし、本章では各トレンチの調査概要についてのみ記すこととする。

(1)第1トレンチ・第2トレンチ

6基の窯跡が確認された斜面上部に、関連遺構の有無を確認するために設定した1×10m及び1×6mのトレンチである。表土を約50cm掘り下げたところで地山面(木下部層)を確認したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。

(2)第3トレンチ

第1～6号窯跡以外の窯跡及び関連遺構の有無を確認するために、ほぼ林道に平行して設定した1×10mのトレンチである。第1号窯跡に隣接しているため遺物の出土も想定して慎重に掘り下げ、約50cmで地山面を確認したが、遺構・遺物は全く検出されなかった。

(3)第4トレンチ

第1号窯跡の灰原の範囲を確認するために2×2mのトレンチを設定した。表土を約1m掘り下げたところで地山面を確認した。遺構・遺物は全く検出されず、灰原もこの区域までは広がっていないことが判明した。

(4)第5トレンチ

第1号窯跡の灰原の範囲及び地山面の傾斜角を確認するために3×10mのトレンチを設定した。地山検出面は地表より約50cmであり、傾斜角は現地表と同様であることが判明した。灰原については次章で詳説するが、範囲は斜面中腹までであり、谷までは及んでいなかった。遺物は、灰原範囲外ではほとんど検出されなかった。

(5)第6トレンチ

第2～6号窯跡の灰原の範囲及び地山面の傾斜角を確認するために3×16mのトレンチを設定した。地山検出面は地表より約50cmであり、傾斜角は、第5トレンチと同様に現地表面と一致した。灰原については、大きく二層に分かれ、出土遺物は上層が瓦、下層は須恵器が大半を占めた。不明の点も残るが、上層は第3号窯跡、下層は第4号か6号窯跡の灰原と推定される。灰原は、斜面中腹までであるが、斜面下部からも流れ込んだ遺物が出土したので、谷部も含めて1×4mのトレンチを設定し、遺物の出土する範囲の確定に努めた。その結果、それほど密ではないが、谷部まで須恵器を主体にした遺物が存在していることが明らかとなった。

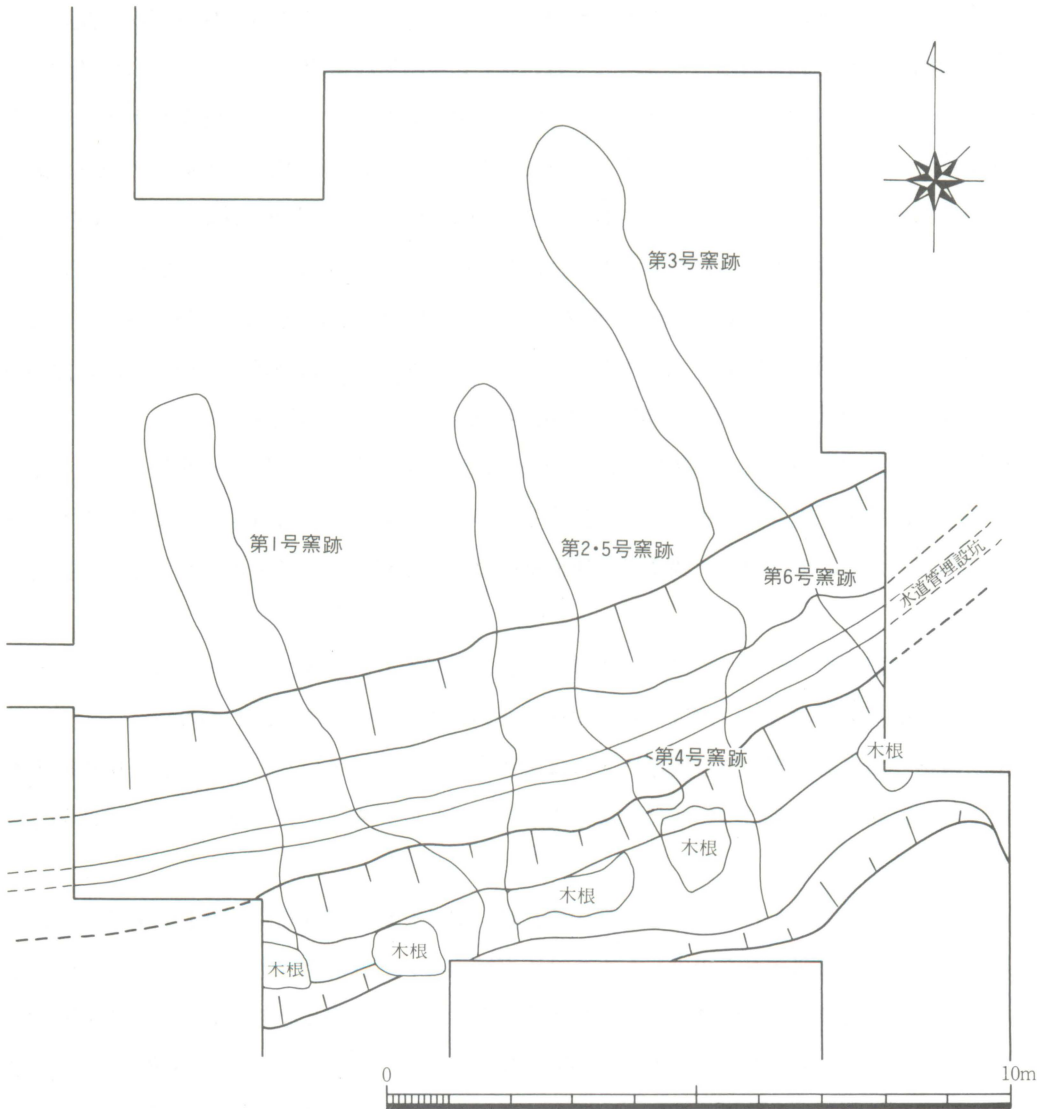
(6)第7トレンチ

第2～6号窯跡の灰原範囲を確認するために2×7mのトレンチを設定した。地山検出面は地表より約50cmであり、トレンチほぼ中央部まで灰原が広がっていた。これによって、矢那

南窯跡の東限が明らかになったといえる。

2. 第2調査区

この地区は、筆者が7年前に布目瓦を表面採集した地点であり、今回の調査の際にも地元住民の石井新一氏より窯の存在の指摘を受けた場所でもある。そこで、林道壁面を精査したところ、炭化物と焼土が混入した落ち込みを確認したので、その性格を解明すべく4×3mのトレンチを設定して掘り下げた。表土下約60cmで地山面となり、落ち込みを中心に精査を実施したが、窯跡等の遺構の検出には至らなかった。



第5図 第1調査区各窯跡の位置と現況実測図

IV. 検出遺構・遺物

今回の調査では、6基の窯跡を確認するとともに、それに伴う瓦・須恵器が出土した。以下、切り合い関係等から第1, 2・5, 4, 3・6号窯跡、灰原内出土で窯を特定することのできない須恵器、灰原直上出土の須恵器、表土出土の須恵器の順に説明する。

1. 第1号窯跡 (第6, 7図 図版6, 7, 12 第1表)

位置と保存状況 窯跡群の一番西側に位置する。標高は焚口床面で57.5m, 窯尻確認面で61.3m, 窯体主軸方位はN-20°-Eである。燃烧部は林道と水道管理設坑によってかなり破壊されているが、前庭部は良好に保存されており、焼成部は地表面から窪みとして確認されるほど保存状況は良好である。灰原も一部が檜の植林によって壊されているのみで保存状況は良い。

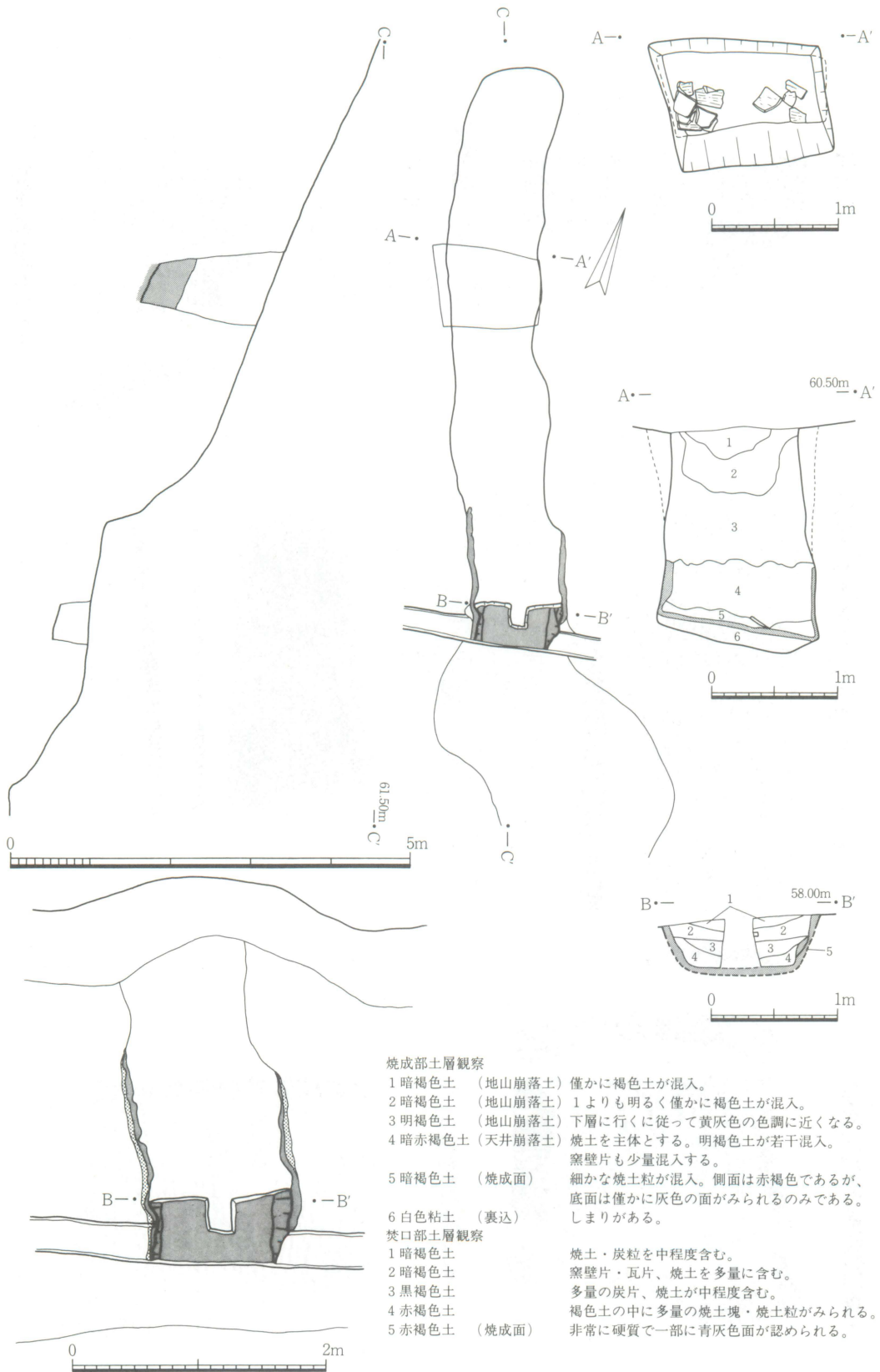
窯体の構造 確認調査段階の所見としては、地下式無階無段窰である。窯体長は推定で6.5mである。焚口は床幅で0.85mで側壁は床面より約0.4m残存しており、傾斜角は7~8°で前庭部に続いている。林道によってかなりの削平を受けており、特に焚口と前庭部の境界付近は水道管理設坑により幅30cmほど切断されている。焼成部は試掘坑地点の床幅で1.25mを測り、床面は一枚で青灰色に還元されているが、良好な焼成面は形成されていない。傾斜角は25°である。試掘坑では地山面から深さ1.6mで窯床となっている。側壁は、赤褐色に堅く焼きしまっており、床面より鋭角に直線的に立ち上がっている。天井部は完全に崩落しているが、床面からの高さは、側壁の状況及び天井上部地山の崩落状況から約1mと推定される。

構築方法は、台地斜面をくり抜いて、その底面に白色粘土を貼って窯床を平坦にしている。床面からは、平瓦・熨斗瓦がまとまって出土しているが、いかにも敷き詰めたようであり、本窯跡で焼成したものではなく、構築時の床面補強ないしは焼台として使用されたものと推定される。

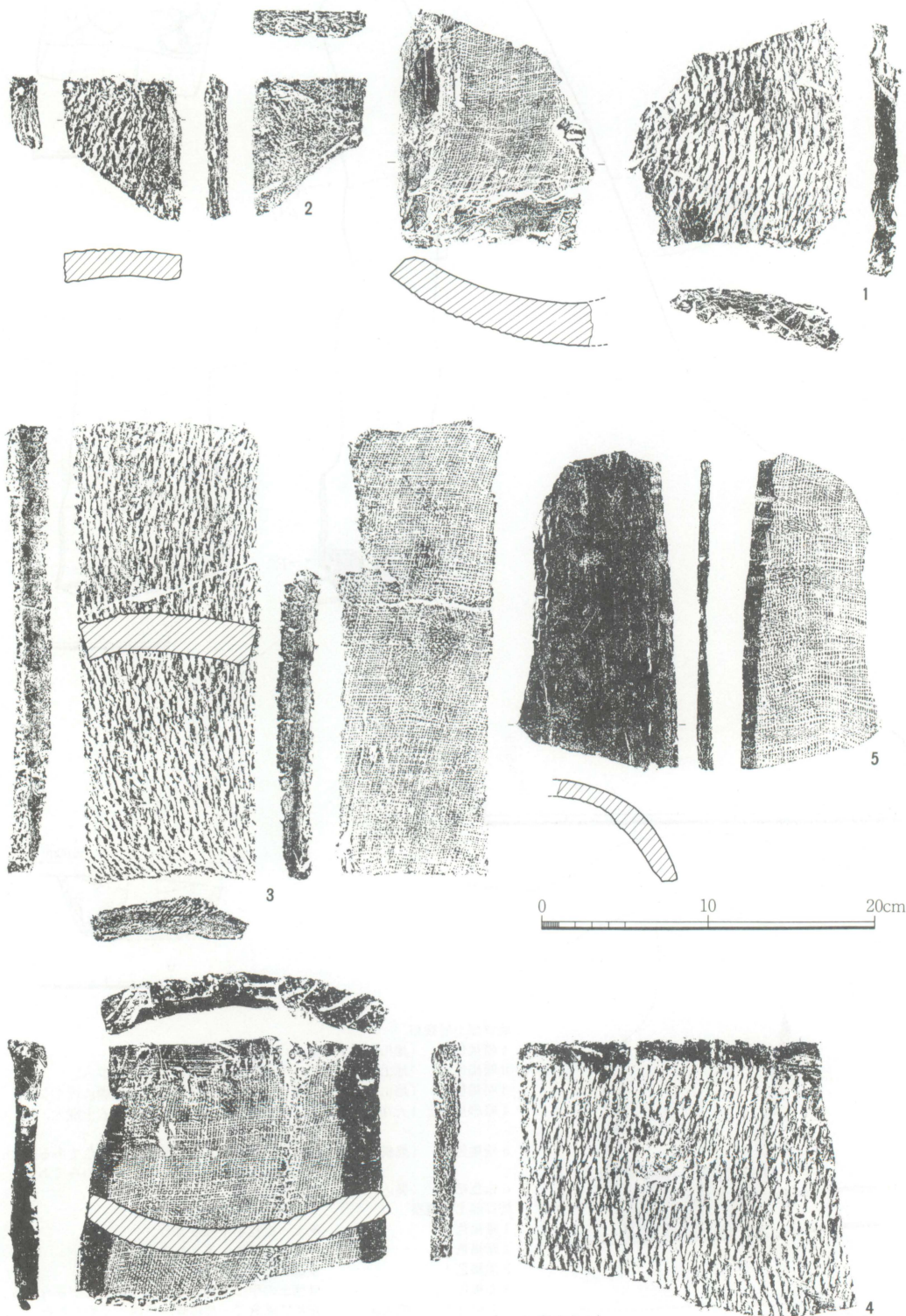
灰原 前庭部から続く台地斜面に不整形に広がっており、中腹で止まっている。他の窯跡の灰原との重複関係はなく、焼成回数も少ないせいかわ厚いところで45cmしかない。

出土遺物 須恵器は窯内及び灰原内からは破片以外は出土していない。ただし、灰原直上から出土した第19図1~7については、灰原内から出土したと考えて差し支えなく、本窯跡で焼成した可能性が高い。

瓦は、本窯跡に関連するものとして隅切平瓦C, 熨斗瓦C, 平瓦C, 丸瓦Bがある。ただし、前述のとおり試掘坑窯床から出土したものは床面補強ないしは焼台として、他の窯跡で焼成されたものが持ち込まれた可能性が高く、本窯跡で焼成されたものとは考えにくい。熨斗瓦(2・3)は横幅にバラエティがあり、大棟の形態を窺わせる。平瓦(4)は、2号窯跡(11)と同様に隅がL字形に切られた結果、通例の平瓦とは異った形態になっており、別種類の道具瓦の可能性もある。



第6図 第1号窯跡平面図及び断面図



第7図 第1号窯跡出土の瓦

番号	種別	凸面 縄タキ		凹面 布目	特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		本/5cm	経糸 本/3cm						
1	隅切平瓦 C	8	20	24	凹面の端面、側面にそって布の端が確認できる。端面に不規則な曇状圧痕がつく。一枚作りの平瓦の隅を斜めにおとしている。	こまかい砂粒、白色針状物質混じる。	淡黄褐色	軟質	
2	契斗瓦 C	10			側面の一方と端面にそって凹面の布の端が表われており、この契斗瓦が本来凸型台を使用した一枚作りの平瓦を分割したものであることがわかる。	非常にこまかい砂粒めだつ。	淡黄褐色	軟質	平瓦分割契斗瓦
3	契斗瓦 C	10	20	20	凹面に平瓦を分割する際の目安か線あり。両側面とも凸面から分割の線を入れ、凹面まで達していない。その部分は分割のまま未調整。	非常にこまかい砂粒めだつ。白色針状物質混じる。	淡黄褐色	軟質	平瓦分割契斗瓦
4	平瓦 C	9	19	22	凹面の布は、端面にそって端が確認でき、布を補修したと思われる布縷あり。側面の片方は雑な仕上げになっており、形からも隅がL字形に切られたものかと考える。	白色針状物質混じる。	淡青灰色～暗セピア色	やや硬質	同じ布縷の平瓦が2号窯出土品の中にあり。
5	丸瓦 B		18	20	凸面は側面に平行する縄タキの後、ヘラケズリ、縄タキのほとんどが消されるが、一部残る。凹面布縷糸がみだれて粗・密が著しい。	石英粒ごく混じる。	淡黄褐色	軟質	

第1表 第1号窯跡出土瓦観察表

窯跡の性格 焼成面及び灰原の形成状況から、修復はなされていない。灰原からは、須恵器と瓦類が混然と出土している。試掘坑窯床と灰原内出土瓦を詳細に比較検討しなければ断定はできないが、灰原内出土瓦がすべて二次的使用とは考えにくく、本窯跡は須恵器と瓦類を同時に焼成したものと考えたい。

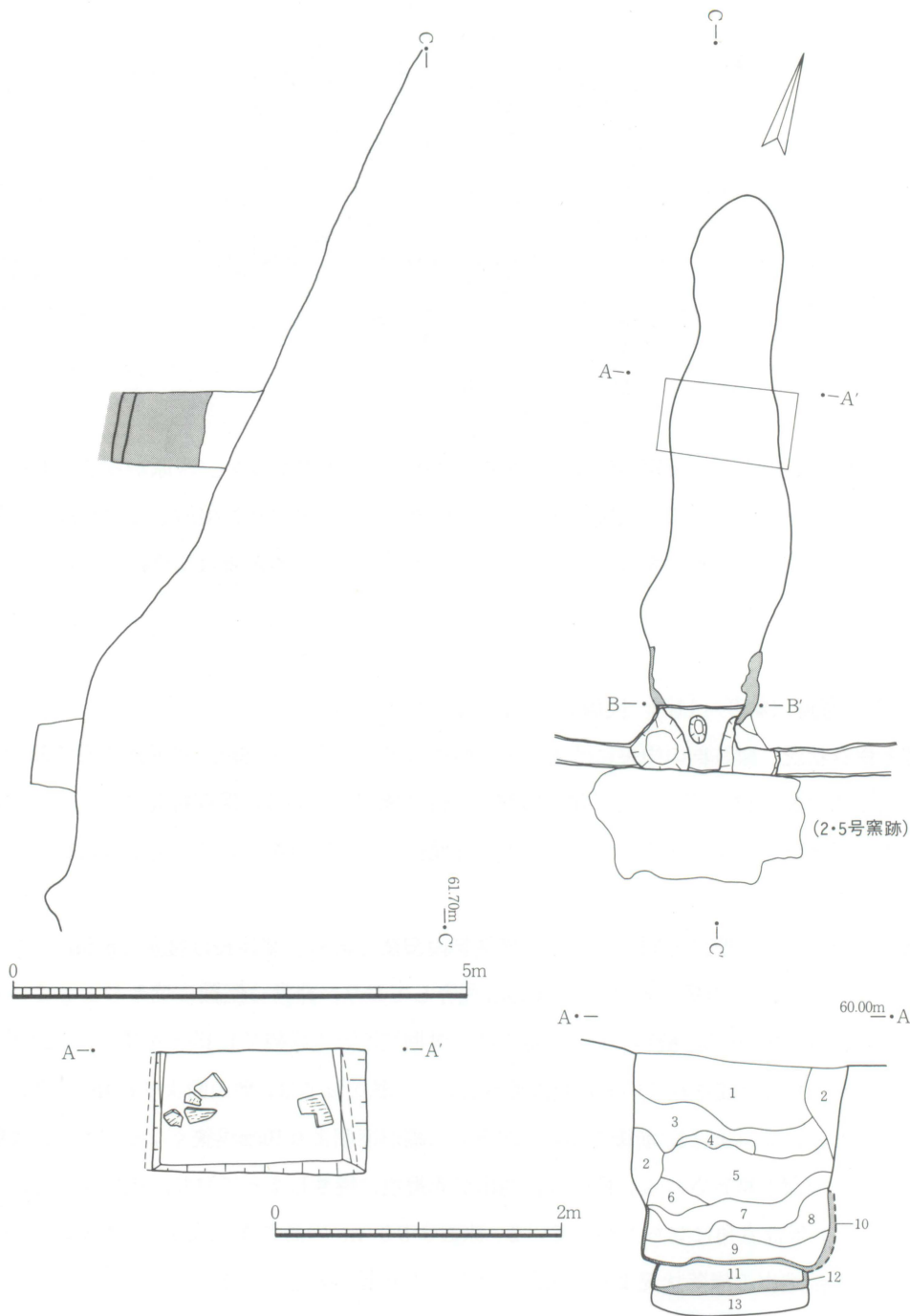
2. 第2号窯跡（第8～11図 図版6～8, 10, 12～14 第2表）

位置と保存状況 窯跡群の中央に位置する。標高は焚口床面で57.6m、窯尻確認面で60.9m、窯体主軸方位はN-12°-Eである。第5号窯の上部に構築している。保存状況については、隣接する第1号窯跡と同様である。ただし、水道管理設坑は、焚口を外れて前庭部を切断している。

窯体の構造 第1号窯跡と同じく地下式無階無段窖窯である。窯体長は推定で5.5mである。焚口は床幅で0.87mで側壁は床面より約0.3m残存しており、非常に堅緻に焼きしまっている。傾斜角は4～5°で前庭部に続いている。焼成部は試掘坑地点の床幅で1.15mを測り、床面は一枚のみで、焼成面は形成されているが焼成度合は弱い。試掘坑では、地山面より1.4mで窯床が検出されており、傾斜角は15°前後を測る。北側の床幅が南側より10cm程狭くなっており、奥壁にかなり近い位置と推定される。側壁は、地山が赤褐色に焼きしまっており、床面より僅かに内彎しながら、ほぼ直角に立ち上がっている。床面より0.4mの高さまで残存しており、その状況及び天井上部地山の崩落状況より、天井の高さは1m弱と推定される。

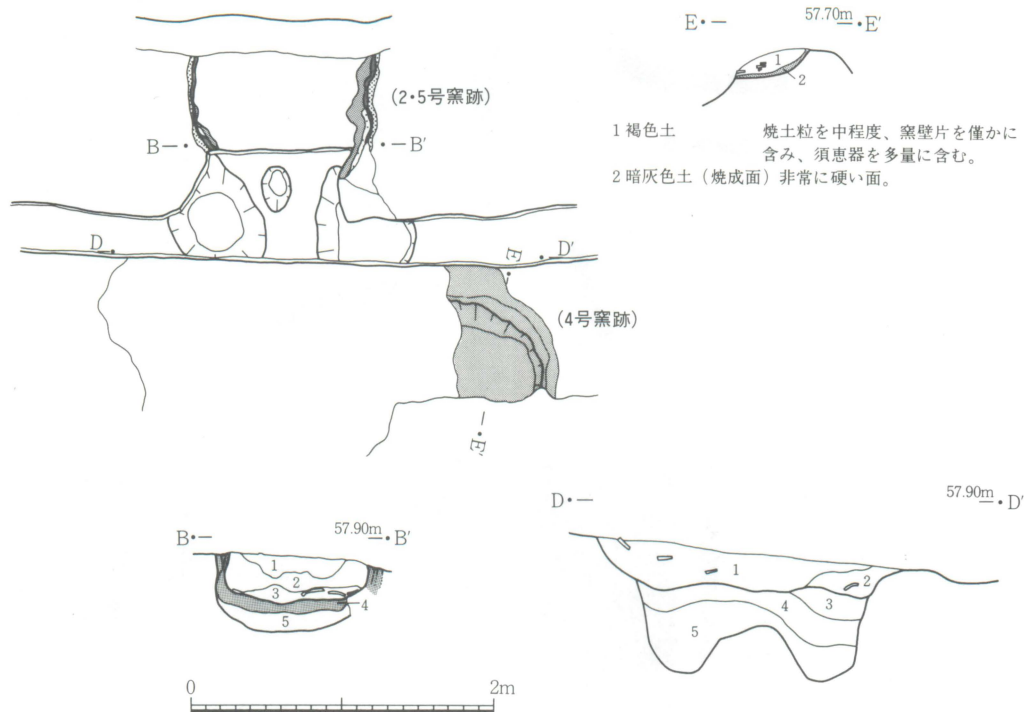
構築方法は、第5号窯跡が台地斜面をくり抜いていた窖を利用して、第5号窯跡窯床より高さ約20cmのところを両側に約15cm拡幅している。さらに第5号窯体内に細かな焼土粒と黒色小石を混入する黄褐色土で貼床をし、窯床を平坦にしている。焚口においても、同様の貼床をしている。窯床からは、第1号窯跡と同様な状態で平瓦が出土している。

灰原 前庭部から続く台地斜面に扇を半分開いたような形で広がっている。両側の範囲は判明したが、東側は第3, 4, 6号窯跡の灰原と重複しており、範囲は不明である。



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土 (地山崩落土) 黄褐色スコリアが僅かに混入する。</p> <p>2 明褐色土 (地山崩落土)</p> <p>3 褐色土 (地山崩落土) 僅かに暗褐色土を含む。</p> <p>4 暗褐色土 (地山崩落土) 1よりも暗い暗褐色土が多量に含まれる。</p> <p>5 褐色土 (地山崩落土) 3よりも僅かに暗く、小石を含む。</p> <p>6 明褐色土 (地山崩落土) 褐色土の中に黄褐色土が混入する。</p> <p>7 暗黄褐色土 (地山崩落土) 黄褐色土と褐色土が半々の土。窯壁片が僅かに混入する。</p> <p>8 暗赤褐色土 (天井崩落土) 暗赤褐色の窯壁片の中に暗黄褐色土が少量混入する。</p> <p>9 黒褐色土 炭片を主体とし、細かな焼土が混入する。</p> | <p>10 暗赤褐色土 (2号焼成面) 焼土粒を主体とする粘性のない土。上面より多量の瓦が出土し、須恵器の小破片がみられる。</p> <p>11 黄褐色土 (2号貼床) 細かな焼土粒と黒色小石を含む。</p> <p>12 暗赤褐色土 (5号焼成面) 赤褐色と青灰色土の硬質面に黄褐色土と焼土塊が混入。</p> <p>13 白色粘土 (5号貼床) しまりがある。</p> |
|--|--|

第8図 第2・4・5号窯跡平面図及び断面図(1)



2号窯跡焚口土層観察

- | | |
|--------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土・炭片を多量に含み、窯壁片を中程度、明褐色土・黄褐色土を少量含む。 |
| 2 褐色土 | 焼土・炭片を多量に含み、窯壁片を中程度含む。 |
| 3 褐色土 | 細かな焼土を多量、窯壁片を僅かに含み、瓦を多量に含む。 |
| 4 暗赤褐色土（焼成面） | 非常に硬く、青灰色・黒灰色の部分認められる。 |
| 5 暗褐色土（貼床） | 焼土塊・焼土粒・炭片・須恵器を多量に含む。 |

2・5号窯跡灰原等土層観察

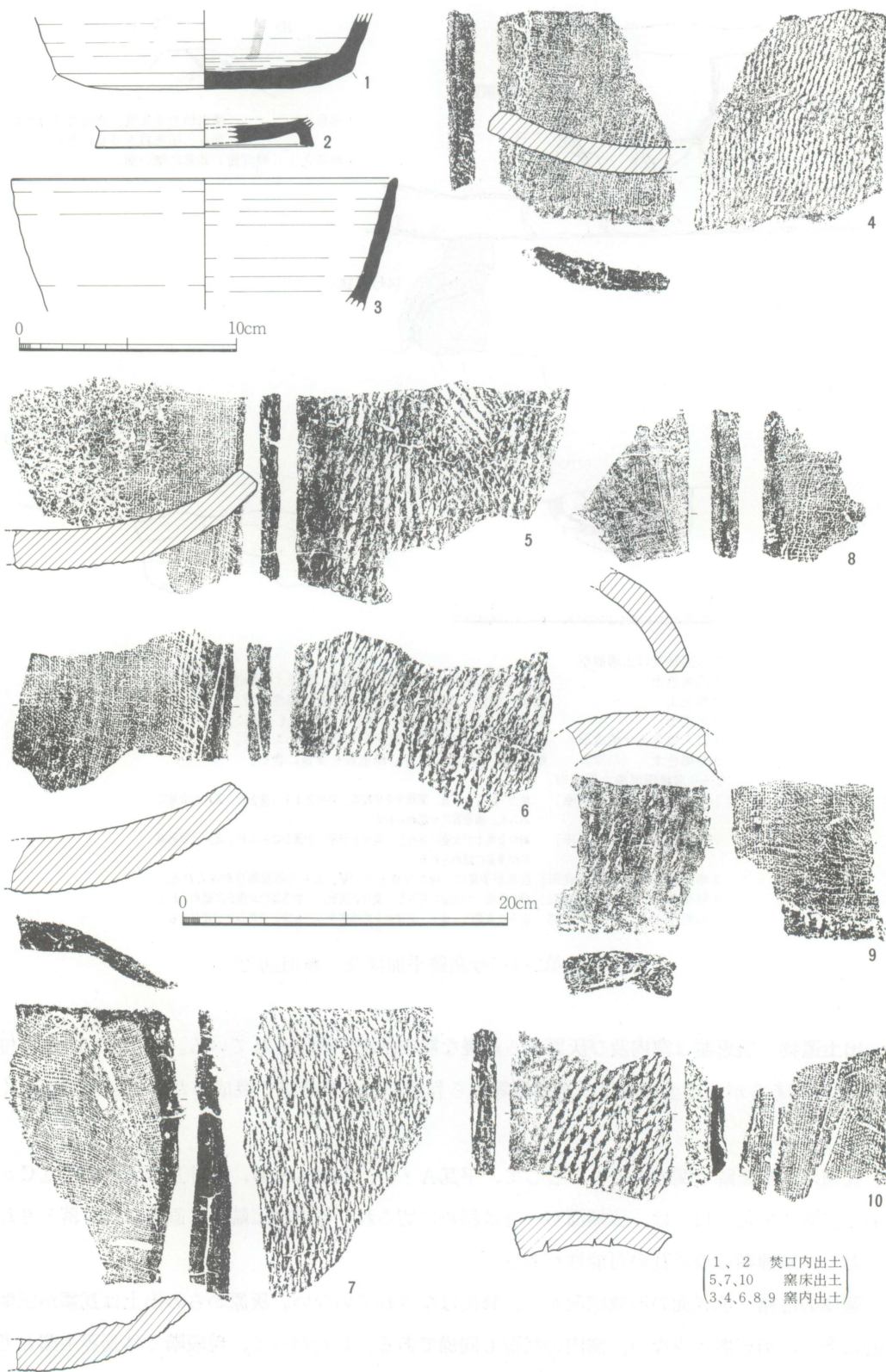
- | | |
|---------------|--|
| 1 暗褐色土（2号灰原） | 焼土・炭片を多量、窯壁片を中程度、明褐色土を少量含む。瓦片が大量にみられ、須恵器片が認められる。 |
| 2 暗赤褐色土（2号灰原） | 細かな焼土が大量に存在し、炭片と窯壁片が僅かにみられ、瓦片と須恵器片が多量に認められる。 |
| 3 暗褐色土（5号前庭部） | 炭片が多量に、細かな焼土が少量、瓦片と須恵器片がみられる。 |
| 4 暗褐色土（5号前庭部） | 細かな焼土が大量に存在し、炭片と窯壁片、須恵器片が僅かに認められる。 |
| 5 暗褐色土（5号前庭部） | 炭片を多量に、焼土・窯壁片を中程度含み、瓦片と須恵器片が存在する。 |

第9図 第2・4・5号窯跡平面図及び断面図(2)

出土遺物 須恵器は窯内及び灰原から散漫な散布状態で検出されている。坏C I (1)高台付坏(2)があるが、出土状況及び遺存度等から判断して、本窯跡で焼成したものとは考えにくい。

瓦類は、本窯跡に関連するものとして、平瓦A・D、丸瓦A・B、熨斗瓦C、隅切平瓦Cがある。隅切平瓦(11)は、広端面が一方は斜めに切られ、他方が広端面に直角に切り落とされており、別種類の道具瓦の可能性はある。

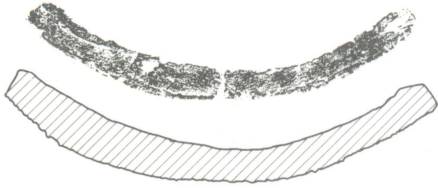
窯体の性格 焼成面の形成状況から、修復はなされていない。灰原からの出土は瓦類が圧倒的に多く、須恵器は少ない。窯内の状況も同様である。したがって、現段階では瓦専用窯と考えておきたい。



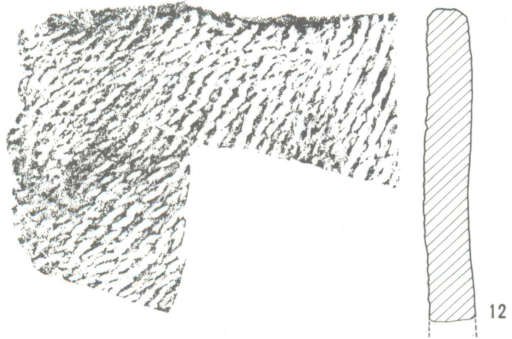
第10図 第2号窯跡出土の須恵器・瓦(1)



11



0 20cm



12

(11 窯内出土)
(12 窯床出土)

第11図 第2号窯跡出土の須恵器・瓦(2)

番号	器種	法 量		遺存度	特徴的な調整	胎 土	色 調	焼 土	備 考	
		口径 cm	器高 cm							底径 cm
1	坏 CI			13.5	底部 1/2	底部全面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内外面 青灰色 断面 セピア色	やや硬質	
2	高台付坏			(高台径) 10.1	底部 1/2		白色砂粒・白色針状物質を含む。	内面～断面 灰色 外面 淡青灰色	やや軟質	
3	坏?	17.8			口縁部～ 底部 1/2		径 1mm前後の小石・石英粒・白色針状物質を含む。	内外面 淡明褐色	軟質	

番号	種 別	凸面縄タキ 凹面布目			特徴的な調整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
		本/5cm	経糸本/3cm	緯糸本/3cm					
4	平瓦 A	14			凹面の端面、側面によって布の端が隠られて確認できることから、凸面型台を使用した一枚作りである。一部側面にも布の端がよぶ。	石英等の砂粒をかなり含み表面サラサラした感じ。	暗褐色	軟質	凸面のタキは細い縄タキで、かなり砂粒まじる。2号窯内で3点、5号窯も1点出土。
5	平瓦 D			22	凹面中央部剥離が著しい。側面及び側面にそった凹面で布の端が確認できる。凸面の縄タキはやや太い。	こまかい砂粒、白色針状物質ごく混じる。	淡青灰色	やや硬質	
6	平瓦 D	7	22	24	凹面の布は、側面によって経糸が解れた布の端あり。凸面の縄タキはやや太い。	こまかい砂粒、白色針状物質混じる。	暗灰色	やや軟質	
7	平瓦 B	12	22	18	凹面の布に補修したものか布綴あり。隅が8cmほど斜めに切られている。凸面の縄タキは重複しているが細いものである。	こまかい砂粒混じる。	赤褐色	やや軟質	同じ布綴じがあるが凸面の縄タキのちがうものが1点1号窯内からも出土。
8	丸瓦 A			24	凸面は端面に平行してナデ。そのちにヘラケズリがおこなわれ、タキ不明 側面の一方が斜めに切られている。道具瓦か。	こまかい砂粒混じる。表面サラサラした感じ	灰色～淡黄色	やや硬質	凸面に縄タキが残るタイプとは別。
9	丸瓦 B				凸面は幅3cmほどのヘラケズリで仕上げられているが、縄タキの痕跡が若干残る。端面に細かくスジ状の圧痕がつく。	こまかい砂粒混じる。	灰色～淡黒色	やや硬質	
10	製斗瓦 C	8	20	26	凹面には、平瓦から分割する際の工具の痕が6本ほど残っている。側面の一方は凹面から布がまわっている。他方は中ほどまで工具が入り凸面側の半分は未調整で分割痕が残っている。	こまかい砂粒、白色針状物質混じる。	淡褐色～淡黒色 生焼か?	軟質	平瓦分割製斗瓦。
11	隅切平瓦 C	9	20	22	凹面の布に広端面から中央部にかけて補修のためか布綴あり。広端面は、一方が斜めに切られ、他方が広端面に直角に切りおとされている。	こまかい砂粒混じる。白色針状物質も混じる。	淡黄褐色	軟質	第7図4の平瓦の布綴と同じである。平瓦全体の大きさを知り得る。
12	平瓦 D	6	20	22	凹面布目の下に弱く糸切り痕残る。端面は製作時凸型台の型からはみだした粘土を端面におしつけ、その後ヘラケズリ、その上に裏状圧痕あり。	こまかい砂粒めだつ。白色針状物質混じる。	灰色～淡黄褐色 ～淡黒色	軟質	

第2表 第2号窯跡出土須恵器(上)・瓦(下) 観察表

3. 第5号窯跡 (第6, 8, 9, 12, 13図 図版6, 8, 13 第3表)

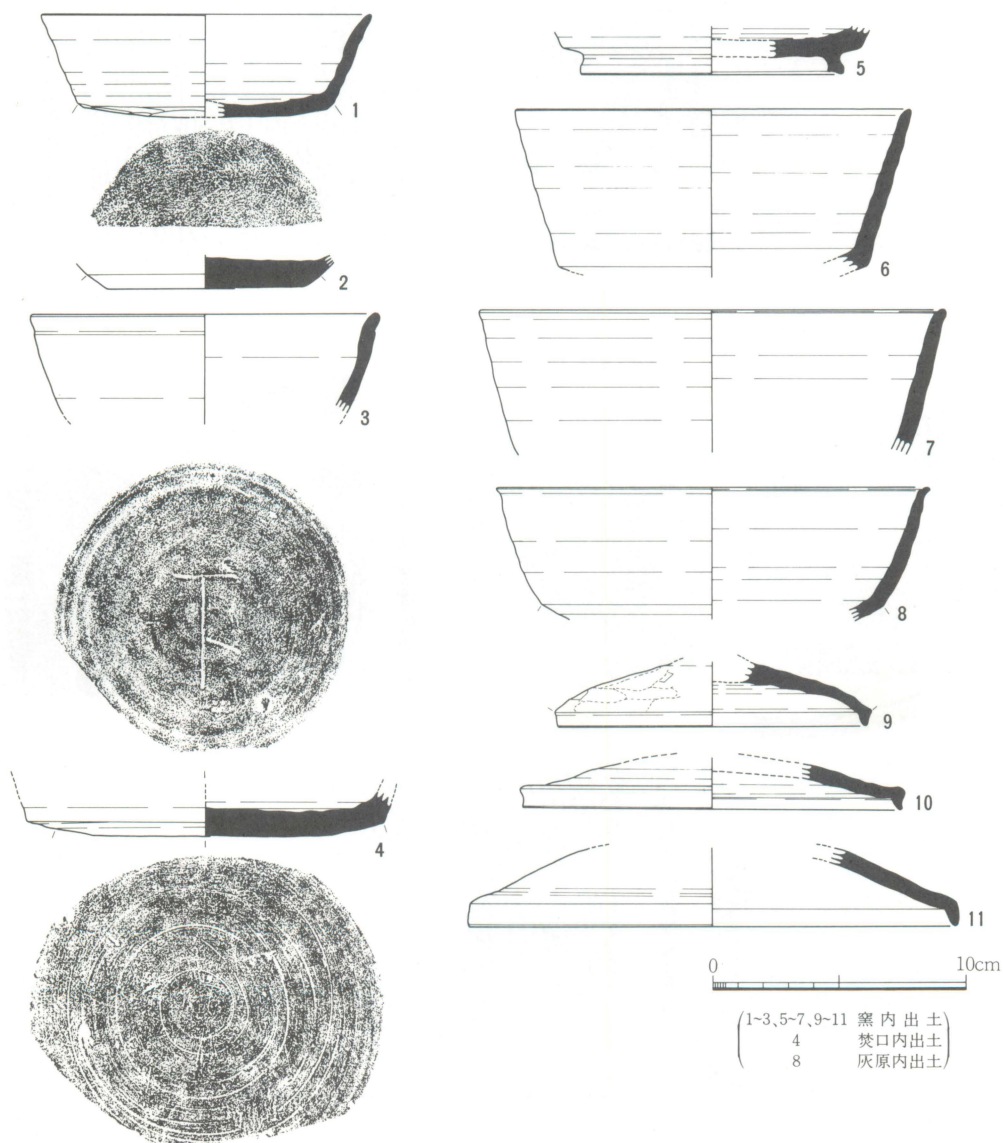
位置と保存状況 第2号窯跡の真下に位置する。当初は、第2号窯第1次窯と呼称しているが、窯跡の性格の違いも認められたので、第5号窯跡とした。両窯跡は、方向は一致しているものの、第2号窯跡の焚口の下は第5号窯跡の灰原となっている。窯尻の確認位置からみて、両窯跡の焚口の位置が、大きくずれているとは考えにくく、第5号窯跡の焚口のほうが、1m程北に寄っていると考えたい。窯体主軸方向は、第2号窯とほぼ一致するが、かなりの部分が第2号窯の構築によって破壊されている。

窯体の構造 地下式無階無段窖窯と考えられる。窯体長は推定で5mである。焚口は、第2号窯跡のために確認することができないので、水道管理設坑を中心に、灰原の状況を確認するために掘り下げたところ、主軸上に20×15cm、窯の中軸に対して1mの間隔を有して左右対称の位置に60×80cmの土坑が確認された。これらの土坑は、いずれも共通の覆土を有し、炭片・焼土・窯壁片を含んでいる。また、柱痕跡も確認されていないことから、作業が停止されるまで開口していたと判断される。性格は不明であるが、土層断面から本窯跡に伴うことは確実である。焼成部は、試掘坑地点の床幅で1.0mを測り、焼成面は一枚であり、赤褐色を基本として

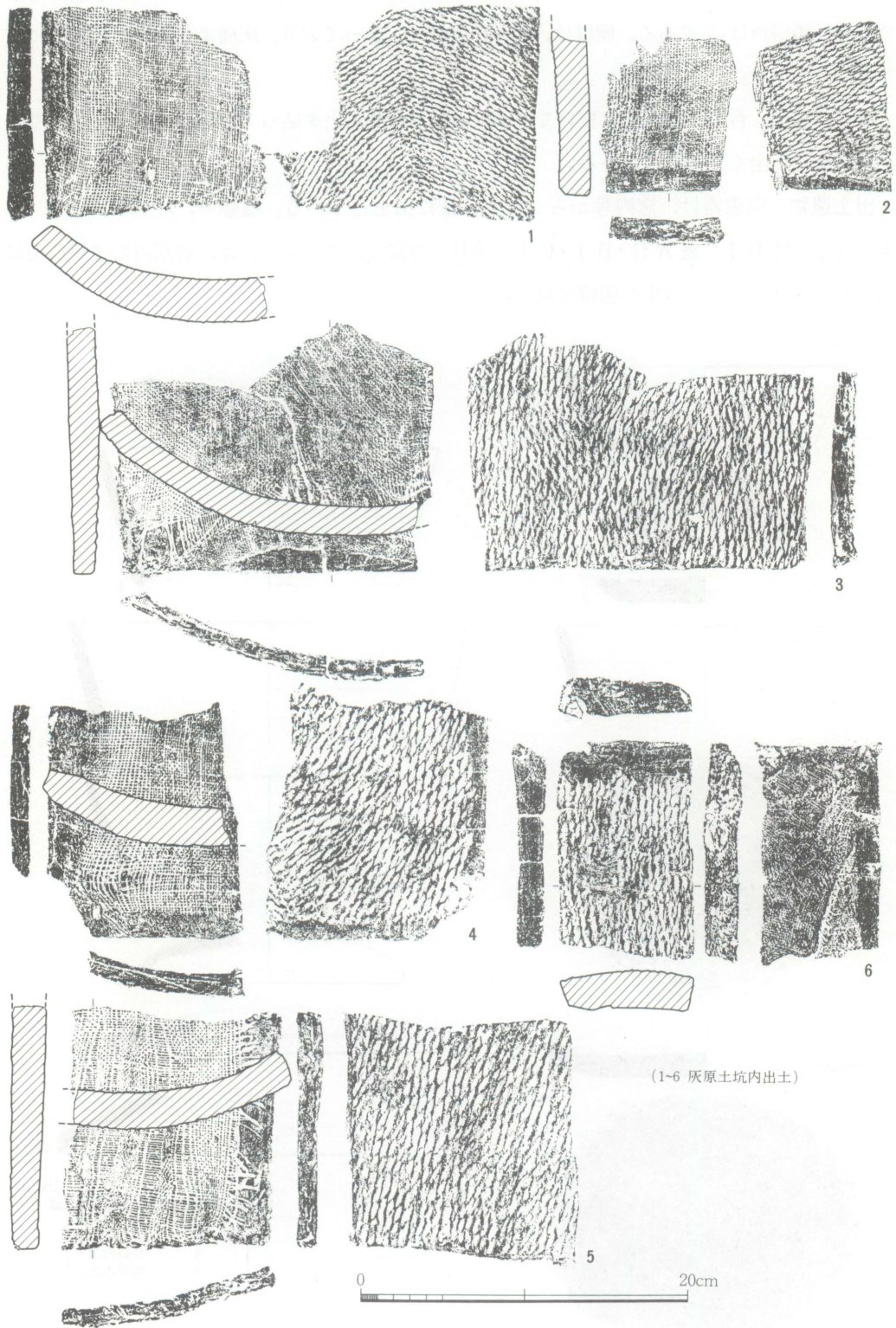
一部青灰色となり、堅緻に焼きしまっている。試掘坑では、地山面より1.7mで窯床が検出されており、傾斜角は13°である。側壁は、赤褐色に焼きしまっており、床面より鋭角に直線的に立ち上がっている。

構築方法は、台地斜面をくり抜いて、その床面に白色粘土を貼って窯床を平坦にしており、第1号窯跡と全く同じ方法である。

出土遺物 須恵器は、窯内等からかなり大量に出土している。種類も、坏A I・B II・C I, 高台付坏B I, 蓋A II・B I・C I, 埴Bと豊富で、坏(4)には、底部内面に焼成前にヘラ書きされた「下」の字が明瞭に見られる。



第12図 第5号窯跡出土の須恵器



第13図 第5号窯跡出土の瓦

番号	器種	法量			遺存度	特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏 B II	13.0	3.9	10	1/2	底部全面に手持ちヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色～暗灰色	やや軟質	
2	坏 A I			7.8	底部 1/2	底部全面及び体部下端に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内面 灰色～褐色 外面 灰色	やや軟質	
3	坏 A I ?	13.8			口縁部～体部 1/2		細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 淡暗褐色～黒色	軟質	
4	坏 C I			14.0	底部 1/2	底部全面回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内面 淡暗褐色 断面～外面 淡明褐色	軟質	底部内面に、焼成前ヘラ書き「下」あり。
5	高台付坏 B I			(高台径) 10.4	底部 1/2		細砂粒を多く含む。	内外面 暗灰色	硬質	
6	高台付坏	15.6			口縁部～体部 1/2		細砂粒、白色針状物質を含む。	内外口縁部 暗灰色 内外面体部 灰色	やや硬質	
7	坏 ?	19.4			口縁部～体部 1/2	口縁内面端部に沈線が巡る。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内面～断面 淡明褐色～黒灰色 外面 淡暗褐色	軟質	
8	坩 B	17.1			口縁部～体部 1/2	口縁端部は外方に引き出され、断面内面には沈線が巡る。体部下端に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色～青灰色	硬質	口縁部から体部外面にかけて灰を被る。
9	蓋 A II	12.2			天井部～端部 1/2	天井部外面全面に手持ちヘラケズリを施した後に加える。	細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 青灰色～暗灰色	硬質	
10	蓋 B I	15.0			天井部～端部 1/2	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内外面 灰色～暗灰色	硬質	内面に火燂痕あり。
11	蓋 C I	19.4			天井部～端部 1/2		細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内面 淡暗褐色 外面～断面 黒灰色～淡明褐色	軟質	

番号	種別	凸面縄タキ			特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		本/5cm	経糸本/3cm	緯糸本/3cm					
1	平瓦 A	15	20	20	凸面の縄タキは細かく、中央部で方向が違うものが重なる。凹面の側面近くで経糸が密になる。凹面の中央部が径約10cmほど黒くなる。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる	灰色～淡黄褐色～淡黒色	やや軟質	焼き台として使用。
2	平瓦 A	16	22	20	凸面のタキは細かく、一部左下りのものと断面に直角方向のものが重複する。断面に凸型台の型と思われる細かいスジあり。	こまかい砂粒めだつ	表面 黒色 断面 セピア色	硬質	
3	平瓦 C	9	22	20	凹面狭断面近くで緯糸がみだれ粗・密が著しい。側面に平行する布の端が壊れ一部側面までおよんでおり一枚作りである。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる	灰色～淡黒色	やや硬質	
4	平瓦 C	10	20	18	側面側で経糸が若干みだれ密になる。中央部に6×8cmほど円形の黒斑があり、焼き台として使用されたものか。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。ごく金雲母混じる。	淡黄褐色	軟質	焼き台として使用。
5	平瓦 C	10			凹面の布は、経糸がみだれ粗・密が著しい。側面にそって解れた布の端が確認できる。断面まで布がかかる。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる	淡黄褐色	軟質	
6	裏斗瓦 C	10	17	20	凹面の布に布織あり。側面は一方がヘラケズリ。反対側には特に分割時の線等なく、割ったままの面が残し未調整。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	淡褐色～赤褐色	やや硬質	

第3表 第5号窯跡出土須恵器(上)・瓦(下) 観察表

瓦類は、平瓦A・Cと裏斗瓦Cが前庭部土坑内から出土している。この中で特に注目されるのが平瓦(1)、(4)である。平瓦を約12cm角に分割したもので、凹面中央に(1)は径10cm、(4)は径8cmのほぼ円形の黒斑が認められる。この黒斑は、それぞれBタイプ、Aタイプの坏の底部及び高台付坏の高台部の径と一致し、これらの土器が正位の状態焼成された際に残された痕跡と考えられる。したがって、(1)、(4)は須恵器を焼成した際に焼台として使用したものと判断される。他の出土瓦をみると、大小の差はあるものの、(3)を除いていずれも(1)、(4)と同様の形態であり、同じ用途が推定される。(3)についても、もともとは二分割されていたものであり、同様に考えられる。よって、本窯跡出土の瓦の多くは焼台として使用されたものと考えて差し支えない。

窯跡の性格 焼成面の状況から、修復はなされていない。須恵器の出土量が多く、瓦類の多くは焼台であることが明らかとなったので、本窯跡は須恵器専用窯と判断したい。

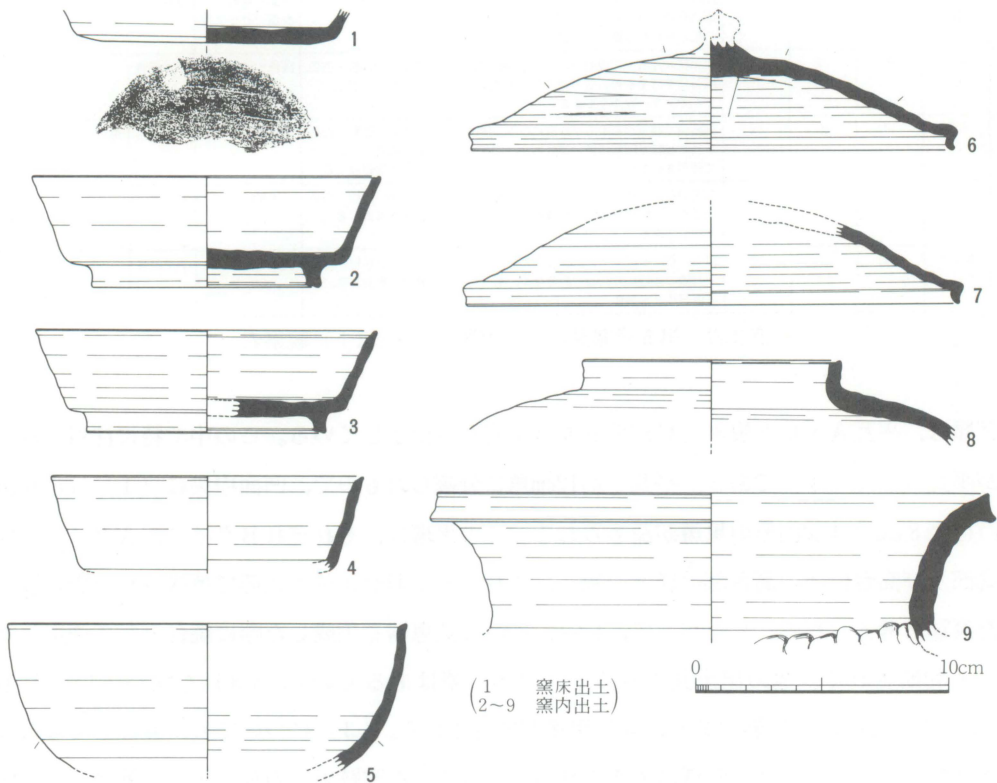
4. 第4号窯跡 (第9, 14図 図版6, 9~11 第4表)

位置と保存状況 第2・5号窯跡と第3・6号窯跡の中間に位置している。第2・5号窯跡灰原に切られている。林道等によって焼成部の一部を残して全壊している。残存している焼成部床面で標高57.4mを測り、第1~3, 5号窯と比較すると一段低くなっている。林道北側斜面でも本窯跡の窯体は確認されず、土層断面を観察すると窯床の傾斜が北側で強くなっていることから、奥壁にかなり近い部分が残存しているものと推定される。

窯体の構造 一部しか残存していないため無段であること以外不明である。ただし、焼成面は暗灰色土に還元されており、非常に堅緻に焼きしまっている。素掘で、窯床等には貼床はなされていない。

灰原 特定することはできなかったが、第3・6号窯跡前面に広がる灰原の下層の一部は本窯跡の可能性がある。

出土遺物 須恵器のみ出土しており、しかも窯体が僅かしか残存していないにもかかわらず、



第14図 第4号窯跡出土の須恵器

番号	器種	法 量			遺 存 度	特 徴 的 な 調 整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏 B II			10.2	底部 1/2	底部全面に手持ちヘラケズリ。	径1mm前後の小石・白色砂粒・白色針状物質を含む。	内外面 灰色	やや硬質	
2	高台付坏 B	13.8	4.3	(高台径) 9.1	1/2	口縁端部に沈線が巡る。底部回転ヘラケズリの後、高台をハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒・白色針状物質を多く含む。	内面～断面 灰白色～暗灰色 外面 灰白～黒灰色	軟質	
3	高台付坏 B	13.5	4	(高台径) 9.5	1/2	口縁部内面端部に稜線が巡る。	細砂粒・白色針状物質を多く含む。	内面～断面 灰色 外面 青灰色	硬質	
4	高台付坏 B	12.3			口縁部～体部 1/2	口縁部内面端部に稜線が巡る。	細砂粒・白色針状物質を多く含む。	内外面 灰白色～暗灰色	やや軟質	
5	碗 A	15.8			口縁部～体部 1/2	体部下半に回転ヘラケズリ。	細砂粒・白色針状物質を多く含む。	内外面 灰白色～暗灰色	軟質	
6	蓋 C I	19.1			1/2	天井部外面に回転ヘラケズリの後、ツマミをハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒、径2mm～5mmの小石が含まれる。	内外面 灰白色	やや軟質	
7	蓋 C I	19.4			天井部～端部 1/2	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 青灰色～灰色	硬質	
8	短頸壺	7.2			口縁部～肩部 1/2	口縁端部に沈線が巡る。肩部内面に指頸痕あり。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も少量含まれる。	内面～断面 灰色 外面 暗灰色	硬質	
9	甕	21.8			口縁部～頸部 1/2	頸部内面下端部に指頸痕あり。	細砂粒を多く含む。	断面 暗灰色 内外面 黒灰色	硬質	内外器表面には薄く灰を被る。

第4表 第4号窯跡出土須恵器観察表

かなり多量に見つかっている。坏B II, 高台付坏B, 碗A, 蓋C I, 短頸壺, 甕と器種も豊富に出土している。高台付坏はすべて口縁部内面端部に沈線の巡るもので、短頸壺は本窯跡で唯一の出土である。

窯跡の性格 窯床直上及び窯床面から須恵器のみが多量に出土しており、須恵器専用窯である。

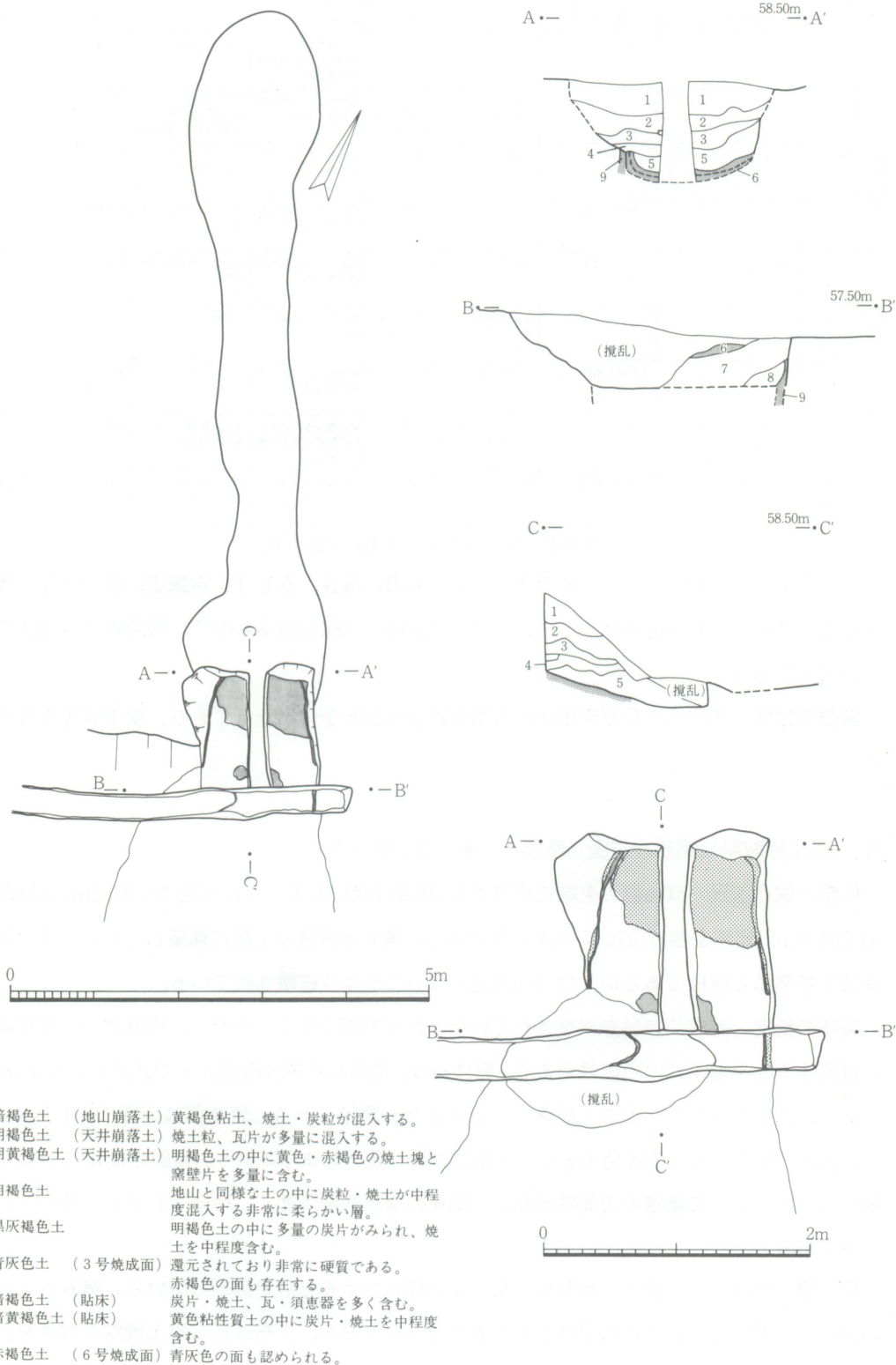
5. 第3号窯跡 (第15～17図 図版6, 9, 13 第5表)

位置と保存状況 窯跡群の東端に位置する。標高は焚口と考えられる地点で57.2m, 窯尻確認面で61.8m, 窯体主軸方位はN-26°-Wである。第6号窯跡の上部に構築している。保存状況は第2号窯跡と同様であるが、焚口は攪乱によってかなり破壊されている。

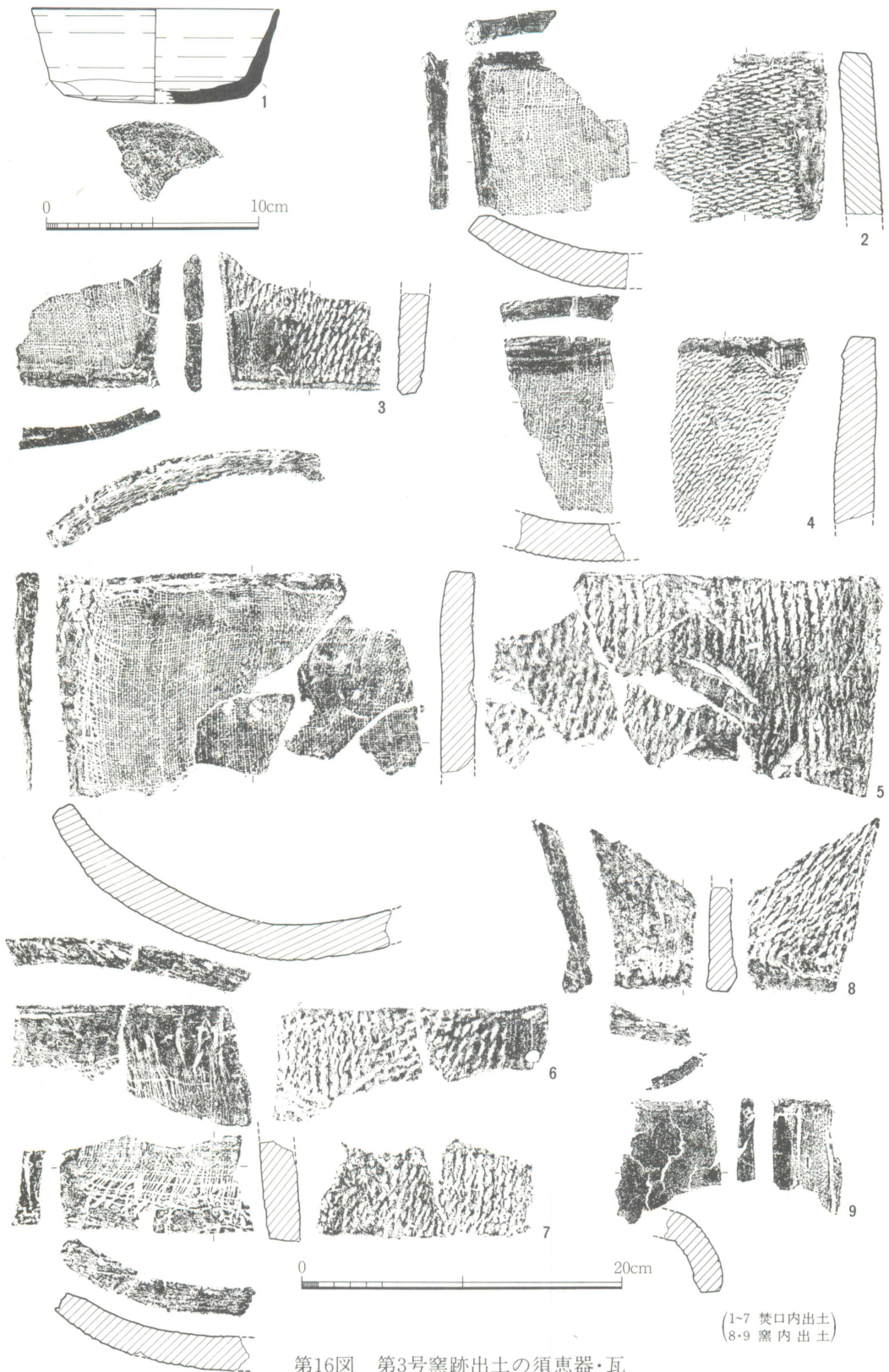
窯体の構造 焼成部の調査がなされていないため不明である。ただし、燃烧部の土層断面から推測すると半地下式の可能性がある。窯体長は、焚口から窯尻確認面まで計測すると9m以上あり、窯尻部はかなり大きく崩落していることが想定される。燃烧部は床幅で約1.1mを測り、床面は還元されて青灰色土となり非常に堅緻に焼きしまっている。傾斜角は18°で、焚口に続いている。よって無階の可能性が高い。側壁の遺存状態は悪く、西側でわずかに残っているのみである。

灰原 前庭部から続く台地斜面に扇を半分開いたような形で広がっている。第6トレンチの説明でも触れたが、この灰原は上下二層に分かれており、上層は瓦が出土遺物の大半を占め本窯跡の灰原となっている。厚さは、最大で50cm前後である。

出土遺物 須恵器は少なく、実測できたのは一点のみである。覆土内からの出土であり、本



第15図 第3・6号窯跡平面図及び断面図



第16図 第3号窯跡出土の須恵器・瓦

(1-7 焚口内出土)
(8-9 窯内出土)

番号	器種	法 量			遺 存 度	特 徴 的 な 調 整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏 A II	11.6	4.3	8.6	1/4	底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を含む	内外面 淡明褐色～ 黒色	軟質	

番号	種 別	凸面縄タキ			特 徴 的 な 調 整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
		本/5cm	経糸本/3cm	緯糸本/3cm					
2	平瓦 A	15	18	22	端面に平行よりもやや左下りの細かい縄タキ。丁寧なつくりであるが、横骨痕はなく、一枚作りと思われる。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	暗灰色	やや軟質	
3	平瓦 B	11	22	22	凸面の隅の部分ナデ。他にもこの部分をナデる例あり。端面から1cmぐらゐのところに端面と平行して幅5mm、深さ2mmほどで凹み。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	灰色	やや軟質	
4	平瓦 A	16	22	18	凹凸面の端面側縁ナデ。縄タキの細かいものに多くみられる。横骨痕なし。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	凸面 黒色 凹面 暗灰色	硬質	第14図2と同工によるものか。
5	平瓦 D	7	18	22	凹面ごく弱く余切り残る。端面にそって膝られた布の端の側面にそって解かれた布の端が確認できる。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	表面 淡褐色～ 黒色 断面 黒色	軟質 生焼か？	まちがいなく3号窯の製品であろう。
6	平瓦 D	8			凹面の端面にそって布の端あり。凹面の端面縁に凸面型からはみ出した粘土あり。第16図5も同様。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	表面 淡褐色～ 暗褐色 断面 淡黒色	軟質 生焼か？	第16図5と同工によるものか。
7	平瓦 C	9			端面にそって解れた布の端あり。	こまかい砂粒・白色針状物質混じる。	表面 暗褐色～ 明褐色 断面 黒色	やや硬質	
8	平瓦 C	10			広端部としたが、ひらきが大きく道具瓦になるか。厚さは広端部が一番厚い。	こまかい砂粒混じる。	灰色	軟質	
9	丸瓦 A				凹凸面ともにヒビが入り表面が荒れて調整不明瞭。凸面の縄タキの痕跡は観察できない。	こまかい砂粒混じる。	暗灰色	硬質	

第5表 第3号窯跡出土須恵器(上)、瓦(下) 観察表

窯跡に帰属するかどうか不明である。

瓦類は、大量に出土しているが、生焼のものが多い。覆土層下部には生焼の瓦がぎっしり詰まっており、焼成段階で天井部が崩落したと考えられる。出土瓦の種類は平瓦と丸瓦で、隅切瓦・熨斗瓦は少ない。平瓦はA～Dまですべての種類が揃っており、丸瓦はAタイプである。

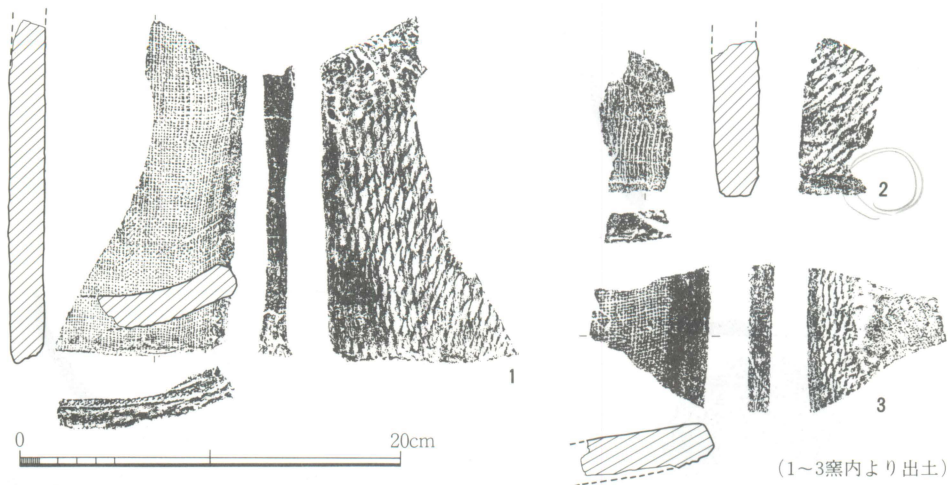
窯跡の性格 焼成面の状況から、修復はなされていない。生焼のものは瓦類のみであり、瓦専用窯と判断される。

6. 第6号窯跡 (第15, 17図 図版6, 9, 14 第6表)

位置と保存状況 第3号窯跡の直下に位置する。当初は3B窯跡としたが、第3号窯跡とは窯の位置がかなりずれていることが判明したため、第6号窯跡とした。今回検出された部分は、かなり奥壁に近い焼成部である。第2号窯跡、水道管理設坑及び攪乱坑により、かなり破壊されている。燃焼部等については、残存していたとしても第3号窯跡の灰原下となっており不明である。

窯体の構造 焼成部側壁のみしか調査は実施しなかったが、両側壁の間隔は、確認された範囲の南端で1.3mを測り、奥壁に向かって徐々に狭くなっており、角度からみてA-A'のラインより北へ1m程で奥壁に達するものと推定される。したがって、立地的には、第4号窯跡とほぼ同じである。焼成面は、赤褐色によく焼きしまっている。

灰 原 第4号窯跡と同様に特定することはできないが、第3号窯跡灰原の下部が本窯跡に



第17図 第6号窯跡窯内出土の瓦

番号	種別	凸面 縄タキ		凹面 布目		特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		本/5cm	経糸本/3cm	緯糸本/3cm	緯糸本/3cm					
1	平瓦 B	11	20	22		端面に、凹面から続く布が中ほどまで続く。	こまかい砂粒多量に含む。	暗灰色～暗黄色～黒色	軟質	
2	平瓦 B	11				端面にこまかいスジ状に窪みあり。凸型台の痕跡か。	こまかい砂粒多量に含む。	暗灰色～暗黄色	軟質	
3	平瓦 A		17	18		凸面はこまかい縄タキ。一部側面とほぼ直角方向のタキと重複。	こまかい砂粒含む。	暗灰色～暗黄色	軟質	

第6表 第6号窯跡出土瓦観察表

帰属する可能性がある。

出土遺物 覆土中からは須恵器が主体に出土しているが、実測できるものはなかった。瓦類は、平瓦A、Bが出土しているが、窯床からではなく、本窯跡に帰属するかどうか不明である。

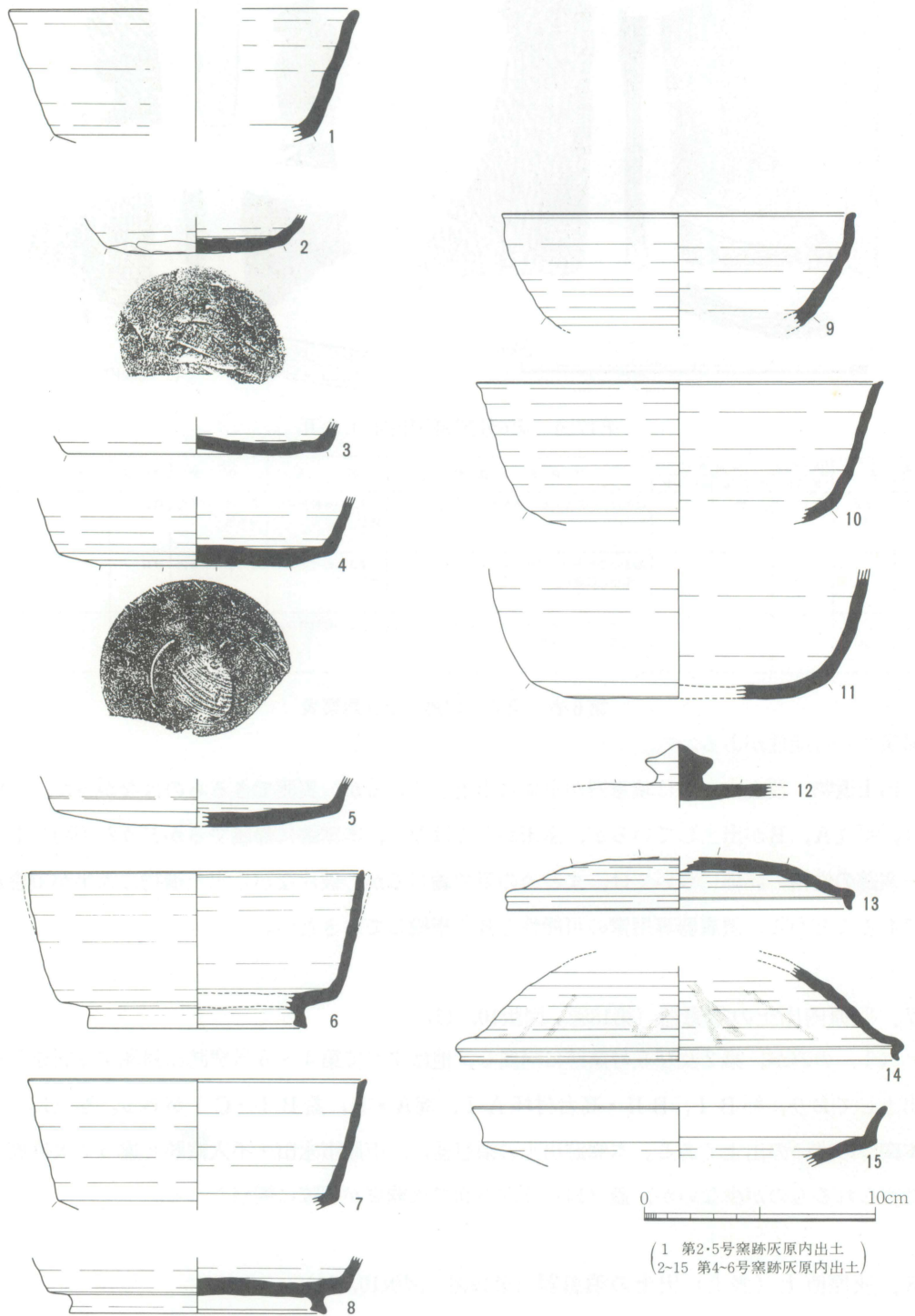
窯跡の性格 詳細については、まとめの章で論じるが、破片ながら出土遺物の大半が須恵器であることから、須恵器専用窯の可能性を強く指摘しておきたい。

7. 灰原内出土の須恵器 (第18図 図版10, 11)

(1)のみが、第2及び5号窯跡に帰属し、他はすべて第4～6号窯跡に帰属する灰原から出土しており、杯B I、B II・高台付坏A I、碗A・B、蓋B I・C Iがある。盤(15)は、本窯跡の唯一の出土である。本窯跡出土の須恵器は、市原市永田・不入窯跡^{註(5)}と違って火襷痕が認められるものが少ないが、蓋(14)は内外面で火襷痕が明瞭に観察される。

8. 灰原直上(表土)出土の須恵器 (第19図 図版10, 11)

(1)～(7)は、第1号窯跡灰原直上から出土している。これらは、一括に近い状態で灰原に食い込んで出土しており、第1号窯跡に帰属するものと考えて問題はない。(8)～(19)については、第2号窯跡から第6号窯跡のいずれに帰属するか不明である。



第18図 灰原内出土の須恵器

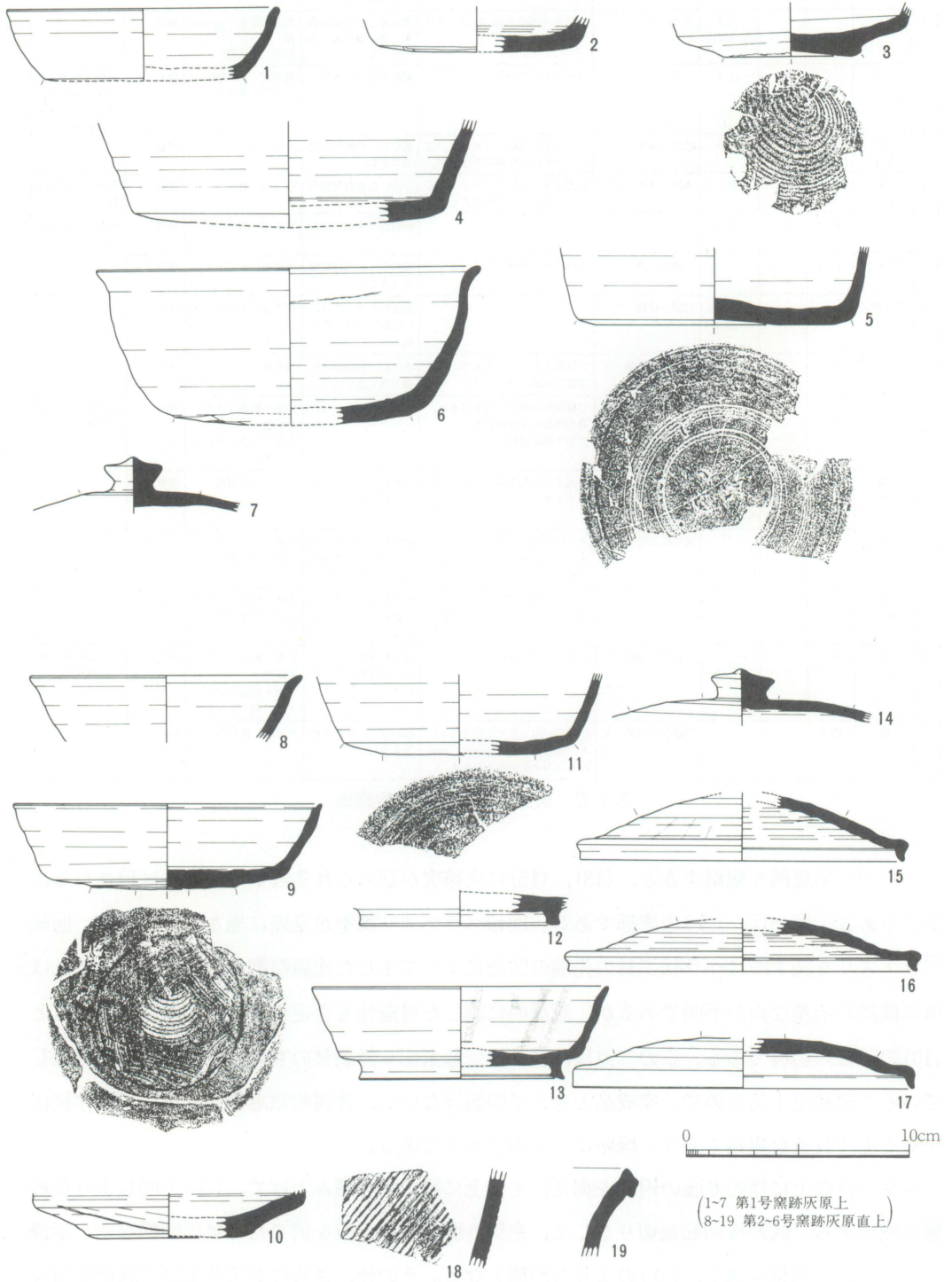
番号	器種	法量			遺存度	特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏?				口縁部～体部 ⅓		細砂粒、白色針状物質を多量に含む。	内外面 青灰色	やや硬質	
2	坏?			5.1 (接地面径)	底部 ⅓	底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質、径1mm前後の小石を含む	内面～断面 淡暗褐色 外面 暗灰色	硬質	
3	坏			11.4	底部 ⅓	底部全面に手持ちヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内外面 暗灰色～セピア色～黒灰色	硬質	底部外面に灰を被り、焼き歪みが著しい。焼き台に使用か?
4	坏 B I			12.0	底部～体部 ⅓	底部全面に回転ヘラケズリ、底部中央部に回転糸切り痕残存。	細砂粒、白色針状物質を含む。	セピア色	硬質	
5	坏 B II			12.2	底部～体部 ⅓	底部全面に手持ちヘラケズリを施した後に、ナデを加える。	小石、白色針状物質を含む。	内外面 青灰色	硬質	内面に自然釉付着。
6	高台付坏 A I	14.6?	6.8	9.5	⅓		細砂粒を多量に含む。	内外面 暗灰色	硬質	焼き歪みが著しい。
7	高台付坏 A I	14.8			口縁部～体部 ⅓	口縁端部に沈線が巡る。	細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 灰色	硬質	
8	高台付坏 A I			(高台径) 11.2	底部～体部 ⅓		細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内外面 暗灰色～灰色	硬質	焼き歪みが著しい。
9	埴 A	15.3			口縁部～体部 ⅓	口縁部を外方に引き出す。体部下端に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 セピア色	硬質	
10	埴 B	17.6			口縁部～体部 ⅓	口縁端部は外方へ引き出され、端部内面には沈線が巡る。体部下端に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内面～断面 灰色～暗灰色 外面 灰色～セピア色～黒灰色	硬質	口縁部から、内外面体部に、灰を被る。
11	埴 B			10.0 (接地面径)	底部～体部 ⅓	底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内外面 暗灰色	硬質	
12	蓋				天井部 ⅓	天井部外面に回転ヘラケズリの後、ツマミをハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒、白色針状物質を含み、径1mm前後の小石を含む。	内面～断面 暗灰色 外面 灰白色	やや軟質	
13	蓋 B I	15.0			⅓	天井部外面に回転ヘラケズリの後、ツマミをハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内面～断面 暗灰色 外面～断面 灰色	硬質	
14	蓋 C I	19.1			天井部～端部 ⅓	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む、白色針状物質も含まれる。	内面～断面 灰色～黒灰色 外面～断面 灰色～セピア色～黒灰色	硬質	内外面端部付近に火燻痕あり。
15	盤	15.9			口縁部～体部 ⅓	口縁部が強く外方に引き出される。体部外面の一部には、粗い縦方向のナデが加えられる。	細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 灰白色	軟質	

第7表 灰原内出土須恵器観察表

これらの須恵器を観察すると、(13)、(15)に火燻痕が認められるほかに、特に注目される点が二つある。第一は、(5)の底部である。回転ヘラケズリ調整が全面に施されているが、回転ヘラケズリを施す際にヘラ状工具の先端の凹凸によって生じた沈線が数条巡っている。これは、単に偶然の所産なのか不明であるが、意識的に施した可能性も否定できない。第二は、(3)と(10)の回転糸切痕である。この二点は、底部は回転糸切り無調整のもので坏A IIIとして分類している。窯跡出土品なので、完成品と考えて問題は無いが、普遍的須恵器坏Bタイプ製作技法を知る上で貴重な資料であり、概略は以下のとおりである。

ロクロ台の上に径約6cmの円柱を据え、その上に粘土紐を積み上げて、(3)と同じような形態に成形する。成形後回転糸切りをして、糸切り面と周辺の段を消すために、回転ないし手持ちヘラケズリ調整を施し、(9)のような形態となる。その後、さらにケズリ上げて底部全面及び周縁ヘラケズリ調整された坏として完成される。高台付坏は、この後に高台を貼付している。

本窯跡の出土の坏類は、基本的には以上のような製作技法を用いていると考えている。



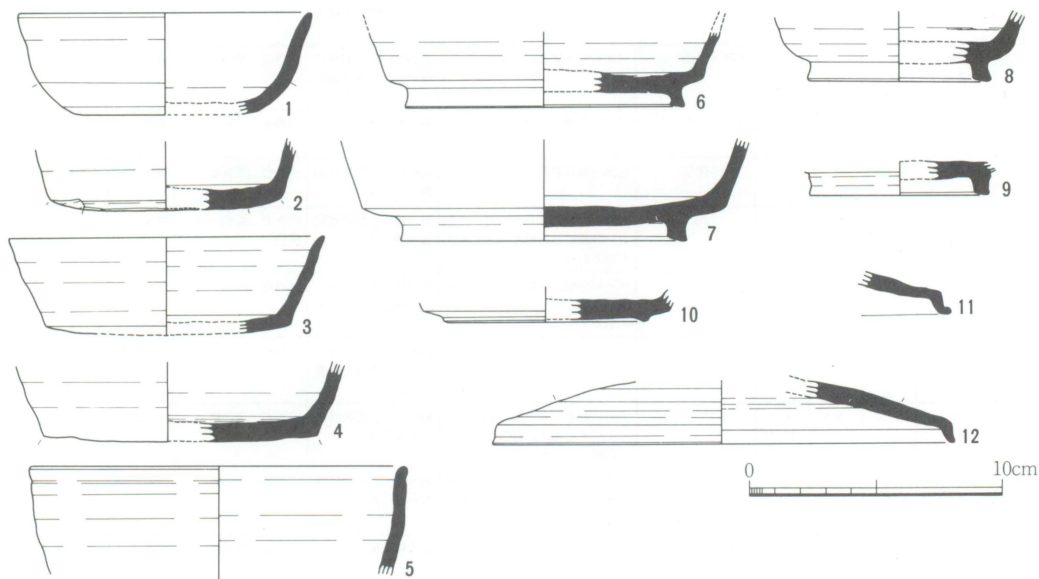
第19図 灰原直上（表土）出土の須恵器

番号	器種	法 量			遺 存 度	特徴的な調整	胎 土	色 調	焼 成	備 考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏 A II	12.2		8.8	口縁部～体部 1/6	底部に手持ちヘラケズリを施した後、ナデを加える。	細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 灰色	やや軟質	
2	坏 A II			8.8	底部～体部 1/6	底部全面に手持ちヘラケズリ。	細砂粒を多く含み、白色針状物質も僅かに含まれる。	内外面 暗灰色	やや軟質	
3	坏 A III			6.2	底部～体部 1/6	底部回転糸切り、無調整。	細砂粒、白色針状物質が多く、径3mm前後の小石を少量含む。	内外面 暗灰色	硬質	
4	坏 C II			13.8	底部～体部 1/6	底部に手持ちヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内外面 灰色	硬質	
5	坏			12.2	底部～体部 1/6～1/4	底部全面に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 青灰色	硬質	底部外面に焼成前線刻「X」あり。
6	埴 C	17.2	6.9	10.5	1/6	口縁部は、強く外方に引き出され、底部には手持ちヘラケズリが施される。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色～青灰色	硬質	
7	蓋				天井部～ツマミ (頂部) 1/4	天井部外面に回転ヘラケズリを施した後、ツマミをハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒を多く含み、径1mm前後の小石を少量含む。	内外面 灰色	硬質	
8	坏 A I	12.2			口縁部～体部 1/6		細砂粒を多く含み、白色針状物質も少量含まれる。	内外面 灰色	やや軟質	
9	坏 B II	13.7	3.8	6.4 (10.3)	1/6	底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリを施す。底部外面中央に回転糸切り痕を残す。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰白色	やや軟質	
10	坏 A III			7.5	底部 1/4	底部回転糸切り、無調整。体部下半に切り離しの際に糸がすれた痕跡が明瞭に残る。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 黒灰色	やや軟質	
11	坏 C I			10.2	底部～体部 1/6	底部全面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含む。	内外面 暗灰色	硬質	
12	高台付坏			(高台径) 9.1	底部 1/6		細砂粒、白色針状物質を含む。	内外面 灰白色	やや軟質	
13	高台付坏 B	13.3	4.0	(高台径) 9.3	1/6		細砂粒、白色針状物質が多く、径1mm前後の小石も少量含む。	細外面 暗灰色	硬質	体部内面に火燻痕あり。
14	蓋				天井部 1/6	天井部外面に回転ヘラケズリを施した後、ツマミをハリツケ、回転ナデを加える。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色	やや軟質	
15	蓋 B I	14.4			端部～天井部 1/6	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒、白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色	硬質	端部外面～天井部外面にかけて火燻痕あり。
16	蓋 B I	15.6			端部～天井部 1/6	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含み、白色針状物質も含む。	内外面 灰白色	軟質	
17	蓋 B I	15.2			端部～天井部 1/6	天井部外面に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含み、径1mm前後の小石も少量含む。	外面 暗灰色 内面～断面 灰色～暗灰色	軟質	
18	甕 (胴部)				胴部片	外面に平行タキあり。内面は、アテ具痕をナデ消している。	細砂粒を多く含む。	内外面 灰白色	やや軟質	
19	甕 (口縁部)				口縁部片		細砂粒を多く含む	内外面 灰色 断面 セピア色	硬質	外面に自然釉付着。焼き歪みが著しい。

第8表 灰原直上出土須恵器観察表

9. 表土出土の須恵器 (第20図)

坏 A I・A II・C I, 埴 A, 高台付坏 A・C, 蓋 C I などが出土している。(10) は高台付坏であるが、高台部は極めて低く、他の高台とは著しく形態を異にしている。(11) の蓋は、端部直上に鋭い稜線を作り、端部をほぼ水平に外方に引き出すといった特徴を有する。焼成も堅緻で丁寧に作られている。



第20図 表土出土の須恵器

番号	器種	法量			遺予度	特徴的な調整	胎土	色調	焼成	備考
		口径 cm	器高 cm	底径 cm						
1	坏 A I	11~12?	4.0	7~7.5?	$\frac{1}{4}$	底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ。	細砂粒, 白色針状物質を含む。	内面 暗灰褐色 外面 灰褐色	やや軟質	
2	坏 A II			9.0	底部~体部 $\frac{1}{2}$	底部ほぼ全面に手持ちヘラケズリ。	細砂粒, 白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色	硬質	
3	坏	12.5	3.8?	9.8	$\frac{1}{6}$	底部にヘラケズリを施すが, 回転か手持ちかは不明。	細砂粒を多く含み, 白色針状物質は, 少量含まれる。	外面~断面 灰色 内面 黒灰色	硬質	
4	坏 C I			11.8	底部~体部 $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$	底部全面に回転ヘラケズリ。	細砂粒, 白色針状物質を含む。	内外面 青灰色	硬質	外面に灰を被る,
5	碗 A	15.0			体部 $\frac{1}{6}$		細砂粒, 白色針状物質を含む。	内外面 灰色 断面 暗灰色	やや軟質	
6	高台付坏 C			(高台径) 11.2	底部~体部 $\frac{1}{4}$		細砂粒, 白色針状物質を多く含む。	内外面 灰白色~暗灰色	硬質	内面底部に火禰痕あり。
7	高台付坏 C			(高台径) 11.4	底部~体部 $\frac{1}{2}$		細砂粒, 白色針状物質を多く含む。	内外面 淡明褐色~淡褐色	軟質	
8	高台付坏 A			(高台径) 7.3	底部~体部 $\frac{1}{4}$		細砂粒を多く含み, 白色針状物質を少量含む。	内外面 暗灰色	やや軟質	
9	高台付坏 A			(高台径) 7.2	底部 $\frac{1}{6}$		細砂粒を多く含み, 白色針状物質を少量含む。	内面 暗灰色 外面~断面 暗灰色~セピア色	やや軟質	
10	高台付坏?			(高台径) 8.2	底部~体部 $\frac{1}{2}$	底部に回転ヘラケズリを加えた後, 高台をハリツケ, 回転ナデを施す。	細砂粒, 白色針状物質を多く含む。	内外面 灰色	やや軟質	
11	蓋				端部片	端部直上に鋭い稜線を作り, 端部をほぼ水平に外方に引き出す。	細砂粒を含む。	内外面 暗灰色	硬質	
12	蓋 C I				端部~天井部 $\frac{1}{6}$	天井部に回転ヘラケズリ。	細砂粒を多く含み, 白色針状物質も少量含む。	端部内外面 暗灰白色 内外面 灰白色	軟質	

第9表 表土出土須恵器観察表

V ま と め

今回は確認調査のため、窯跡群の全容を解明するまでには至らなかった。ただし、各窯跡群の変遷、他窯跡との窯構造の比較検討、瓦陶兼業の問題、須恵器・瓦の製作技法の検討及び他窯跡との比較、供給先、操業の実年代等、各種の問題が生じており、本章では各窯跡の変遷、須恵器生産、花山遺跡から出土した本窯跡産と考えられる須恵器・瓦の供伴遺物の問題に絞って検討することとしたい。

1. 各窯跡の変遷

各窯跡の切り合い関係をまとめると以下のとおりとなる。

- ・第5号窯跡は、第2号窯跡の直下となっており、切られている。
- ・第4号窯跡は、第2・5号窯跡の灰原によって破壊されている。
- ・第6号窯跡は、第3号窯跡の直下となっており、切られている。

他の要素から、各窯跡群の新旧関係を知る上で参考となるものを列挙すると以下のとおりである。

- ・第1号窯跡と第5号窯跡焼成部の構築方法及び形態が同じである。
- ・第4号窯跡と第6号窯跡の立地が、他の窯跡より一段低く共通している。
- ・第4号窯跡の灰原は少なくとも、第3号窯跡よりは下に位置する。
- ・第1号窯跡出土瓦(4)と第2号窯跡出土瓦(1)の布綴が同じである。

以上の点から、各窯跡の新旧関係が明らかなものを号名のみで記すと、5→2、4→2・5、6→3、4→3となる。さらに、4と6の関係については立地からみて、ほぼ同時と考えられる。まとめると、4・6→5→2、4・6→3となる。これらを、何を焼成したかによって記すと、それぞれ須恵器・?→須恵器→瓦、須恵器→瓦となる。第1号窯跡は瓦陶兼業であることから、第5号窯跡と第2号窯跡の間に位置する可能性が強い。この点を加えると、4・6→5→1→2・3と考えることができる。つまり、本窯跡は須恵器を焼成することを目的にして開窯し、瓦陶兼業を経て、瓦専用窯への転換を図っていたと考えることができる。

このように操業内容が変化した背景については、開窯当初に焼成された須恵器から検討したい。第4号窯跡の須恵器は、(1)～(4)のような日常什器と(5)～(7)のような仏器的な形態のものが相半ばして出土している。したがって、供給先は、焼成量を考え併せると一般の集落まで普遍的に供給していたとは考えにくく、操業の主体者及びその周辺と寺院であり、具体的には郡司階層とその氏寺ないしは郡名寺院と考えられる。瓦類には、軒先瓦は皆無であり、可能性としては軒瓦のみ別の窯跡で焼成させたと考えられることもできるが、基本的には、寺院の補修瓦を焼成したと考えるのが妥当であろう。

矢那北窯跡第1号窯は、三次にわたる窯の構築がなされ、地下式無階有段→地下式無階無段→半地下式無階無段と変遷することが明らかとなっている。^{註(96)}この二次窯は、南窯跡第4号窯の影響とも考えられ、一時的には北窯跡で瓦、南窯跡で須恵器を同時に生産していた可能性も指摘できる。いずれにしても、郡司階層が独占的に矢那窯跡群の窯業生産を掌握し、必要に応じて須恵器及び瓦生産を行っていたと考えている。

2. 奈良時代の須恵器生産について

須恵器生産の問題については、市原市永田・不入窯跡の性格と実年代の提示以降、^{註(97)}盛んに論じられているが、基本的には、上総国分寺の建立を契機にして永田・不入窯跡の操業が開始され、市原市石川窯跡に^{註(98)}継続し、その間に本窯跡や千葉市南河原坂第4遺跡^{註(99)}の操業がなされたが、9世紀中葉に南河原坂第4遺跡の西側から発見された窯跡などで小規模な操業が継続されたのみで、大規模な窯業地帯の形成には至らなかったと考えられている。つまり、窯業地帯形成の問題は別にして、上総国における須恵器生産は、永田・不入窯跡を中核にして、^{註(100)}各郡に波及したと考えられがちであったといえる。

ところが、本窯跡の須恵器を観察すると、永田・不入窯跡の製品とほとんど区別がつかないものも多く含まれているが、仏器に類するものでは永田・不入窯跡には認められないものが多く、両窯跡が同一工人ないし同系統の工人である可能性は極めて少ないと判断される。本窯跡は、各窯が切り合い関係等も有し、全く同時期ではないが、各窯出土の須恵器及び瓦類に大きな差を見出すことはできず、かなり短期間な操業を考えることができる。須恵器の詳細な分析は実施していないものの、永田・不入窯跡と比較すると、永田14号窯跡から5号窯跡の製品と類似関係を有すると考えられる製品が出土している。つまり、永田・不入窯跡の操業開始時期には、矢那南窯跡においても須恵器生産が開始されていたことになる。こうなると、永田・不入窯跡の操業の契機もあえて上総国分寺の建立に結びつける必要もないともいえる。山辺郡に所在する南河原坂第4遺跡で生産された須恵器の供給先については小食土廃寺が^{註(101)}挙げられているが、^{註(102)}あえて寺院のみへの供給を想定する必要もなく、本窯跡と同様な性格を有していたと考えることもできる。

以上のように、上総国における須恵器生産は、永田・不入窯跡を核にして分散していったのではなく、国のみならず郡段階においても、郡司階層の必要に応じて操業が開始されたものと推定される。他の郡においても、須恵器窯や瓦窯が検出される可能性は極めて高い。

3. 花山遺跡^{註(103)}出土の本窯跡産須恵器・瓦の検討

花山遺跡は、本窯跡の西方約500mに所在する遺跡であり、奈良時代の竪穴住居跡が数多く検出されている。実見はしていないが、本窯跡産と考えられる須恵器・瓦が土師器等と供伴して

いるので、その土師器の年代観について、従来の研究の成果^{註34)}を踏まえて検討しておきたい。

29号住居址 坏B Iが出土している。供伴遺物から斜格子暗文は出土していないが、II a期と考えられ、8世紀第2四半期後半である。

98号住居址 蓋C Iが出土している。Eタイプ上総型坏が出土しており、8世紀第3四半期である。

109号住居址 須恵器は出土していないが、碗Cと同タイプの斜格子暗文を有する土師器碗が出土している。C及びDタイプの上総型坏が数多く出土しており、II a期の所産と考えられ、8世紀第2四半期後半である。なお、この土師器碗は、須恵器碗Cの模倣と考えている。

111号住居址 蓋B Iの破片が出土している。E及びFタイプの上総型坏が多く出土し、II c期の所産であり、遠寺原編年まで、8世紀第4四半期と考えられている。^{註35)}

150・151号住居址 平瓦C又はD、丸瓦Bが出土している。丸瓦は、本窯跡産である。

180号住居址 坏A I・B I、高台付坏Cが計9点出土している。Eタイプの上総型坏が多く出土しており、II b期であり、遠寺原編年でもI期に当たり、8世紀第3四半期である。

191号住居址 平瓦C又はDが多く出土している。本窯跡産かどうか不明である。

196号住居址 坏A Iが出土しており、これはFタイプの上総型坏であり、遠寺原編年で8世紀第4四半期と考えられている。

4. 結 語

確認調査であったため、窯構造の把握には不十分な点が多かったが、窯跡の範囲についてはほぼ確定することができたと考えている。ただし、あくまで窯本体についての確認であり、粘土採掘地点及び工房跡等については調査することができなかった。

使用した粘土は、海成層のものが焼成に適するかといった問題もあり、一概に論じることはできないが、窯体を掘り込んだ上岩橋部層・木下部層（成田層）に狭まれた粘土を使用したとするのが、一番自然であろうと考えている。なお、この粘土を府中市立博物館の英太郎氏に依頼して焼成実験（混物をせずに、960～1000度で1時間）を実施したところ、かなり堅緻に焼きしめることが判明している。ただし、灰白色を呈した粘土は焼成途中で割れてしまい、焼き上がると、83%に縮んでしまうことも判明し、他地域のものと比較しても、縮小率がかなり高いとの事であった。

工房跡については、2ヶ所ほど周辺に平場があり、候補地として考えたが、時間の都合及び土地所有者の関係から調査することができなかった。今後の課題である。

本窯跡は、当初から3基の須恵器窯と想定して調査を開始したわけであるが、須恵器窯として操業が開始されながら、瓦陶兼業を経て、瓦専用窯に転換するといった、複雑な様相を有することが明らかとなった。しかしながら、粘土採掘坑や工房跡も確認できず、窯業生産の構造

的解明は極めて不十分であったことは認めざるを得ない。本窯跡周辺は、現在は閑静な山林となっているが、大規模開発の計画も一、二あったやに聞く。本窯跡は矢那北窯跡を含めると、永田・不入窯跡に次ぐ県下第2の窯跡群であり、瓦陶兼業窯といった特徴も有している。したがって、保存を第一にして、近い将来に総合的な調査が実施されることに期待をして、筆を擱くこととしたい。

註

- (1) 川上泰男他 1979.3 『土地分類基本調査 姉崎・木更津』 千葉県企画部企画課
- (2) 平野雅之 1988.3 『花山遺跡』財団法人君津郡市文化財センター
- (3) 須田 勉 1980.10 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』433～474頁 滝口宏先生古稀記念考古学論集編集委員会
- (4) 大岩好昭他 1978.4 「103 大久保牛ヶ作瓦窯跡」『企画展 房総の古瓦』38頁 千葉県立房総風土記の丘
- (5) 森本和男 1985.3 『君津市九十九坊廃寺址確認調査報告』財団法人千葉県文化財センター
- (6) 大岩好昭他 1978.4 「104 大鷲瓦窯跡」『企画展 房総の古瓦』39頁 千葉県立房総風土記の丘
- (7) 永沼律郎氏の御教示による。
- (8) 大川 清 1967.10 「木更津矢那瓦窯址」『古代』49・50合併号 126～134頁 早稲田大学考古学会
- (9) 須田 勉 1983.5 「関東地方の瓦窯 I 瓦窯②」『佛教藝術』148 24～44頁 佛教藝術学会
- (10) 註(8)と同じ。
- (11) 大川 清 1977.2 『日本の古代瓦窯』 雄山閣出版株式会社
- (12) 大岩好昭他 1978.4 『企画展 房総の古瓦』 千葉県立房総風土記の丘
- (13) 註(9)と同じ。
- (14) 佐久間豊他 1983.10 「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」『シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器』 1～16頁 史館同人・市立市川考古博物館
- (15) 須田 勉 1986.3 「IV窯業」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 81～90頁 千葉県教育委員会
- (16) 佐久間豊 1986.3 「房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」『研究紀要』10 339～354頁 財団法人千葉県文化財センター
- (17) 笹生 衛 1987.1 「安房・上総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』 283～297頁 房総歴史考古学研究会
- (18) 白井久美子他 1987.3 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)ー市原市・君津・長生地区ー』 財団法人千葉県文化財センター
- (19) 註(2)と同じ。
- (20) 註(9)と同じ。
- (21) 註(14)と同じ。
- (22) 註(16)と同じ。
- (23) 註(15)と同じ。
- (24) 註(2)と同じ。
- (25) 戸田有二他 1976.3 『千葉県永田不入窯跡調査報告書』千葉県教育委員会。
- (26) 註(8)と同じ。
- (27) 須田 勉 1977.3 「坊作遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査研究』IV 上総国分寺台発掘調査団
- (28) 奥田正彦 1988.3 『市原市石川須恵器窯跡確認調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター
- (29) 倉田義広 1987.1 「下総の須恵器窯」『房総における歴史時代土器の研究』268～281頁 房総歴史考古学研究会
- (30) 註(16)と同じ。
- (31) 永沼律朗 1986.3 『千葉市小食土麩寺跡確認調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター
- (32) 註(28)と同じ。
- (33) 註(2)と同じ。
- (34) 佐久間豊 1983.10 「斜格子状暗文を有する土師器坏について」『史館』第15号 92～119頁 史館同人
註(14)と同じ。
- (35) 笹生 衛 1987.1 「3 君津郡袖ヶ浦町遠寺原遺跡(旧望阿郡)」『房総における歴史時代土器の研究』47～68頁 房総歴史考古学研究会

写 真 图 版



上名主ヶ谷窯跡と周辺の地形 (1/10,000)



1. 遺構確認状況（南西から）



2. 遺構確認状況（南東から）

1. 第1調査区調査前
(南西から)



2. 第1トレンチ
(西から)



3. 第2トレンチ
(南から)



1. 第3トレンチ
(東から)



2. 第5トレンチ
(南から)



3. 第5トレンチ
西壁土層断面
(南東から)



1. 第6トレンチ
(南から)



2. 第7トレンチ
(西から)



3. 第2調査区
(北から)



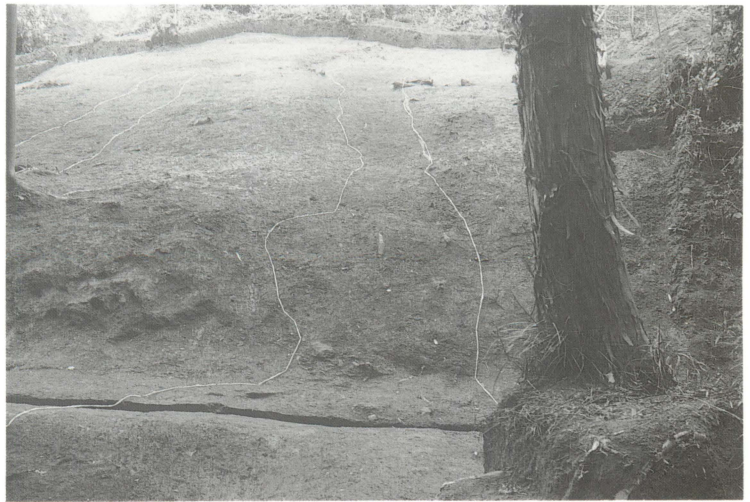
1. 第1号窯跡確認状況
(南から)



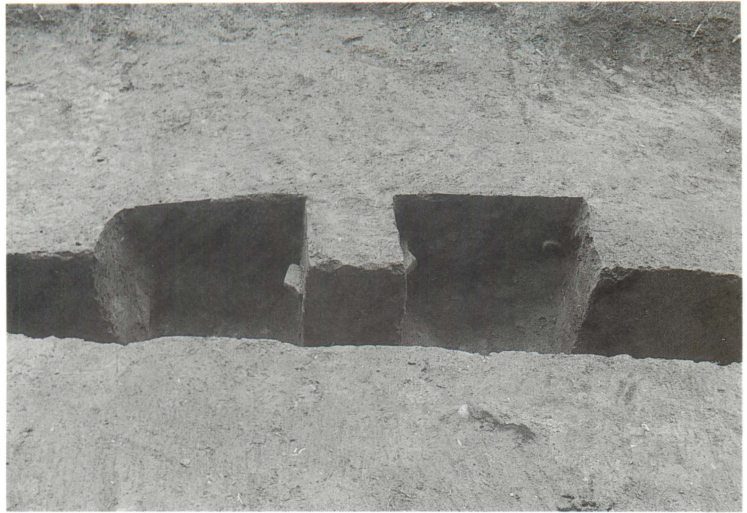
2. 第2・4・5号窯跡
確認状況
(南から)



3. 第3・6号窯跡
確認状況
(南から)



1. 第1号窯跡燃烧部
(南から)



2. 第1号窯跡
遺物出土状況
(南から)



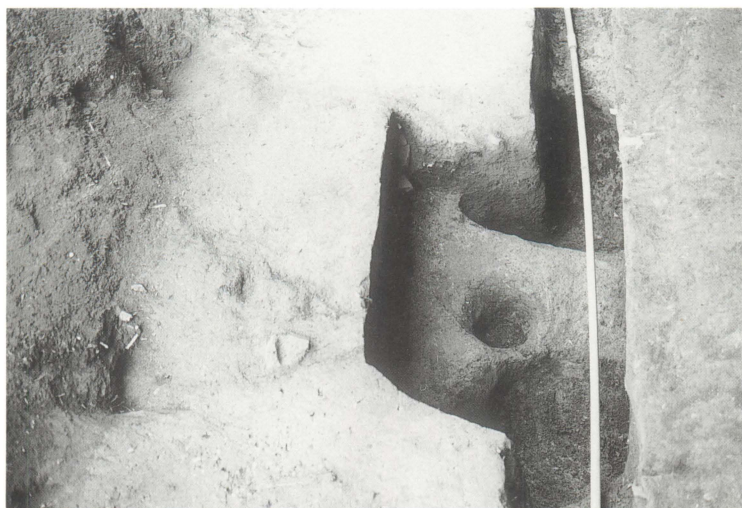
3. 第2号窯跡試掘坑土層断面
(南から)



1. 第2号窯跡燃烧部
(南から)



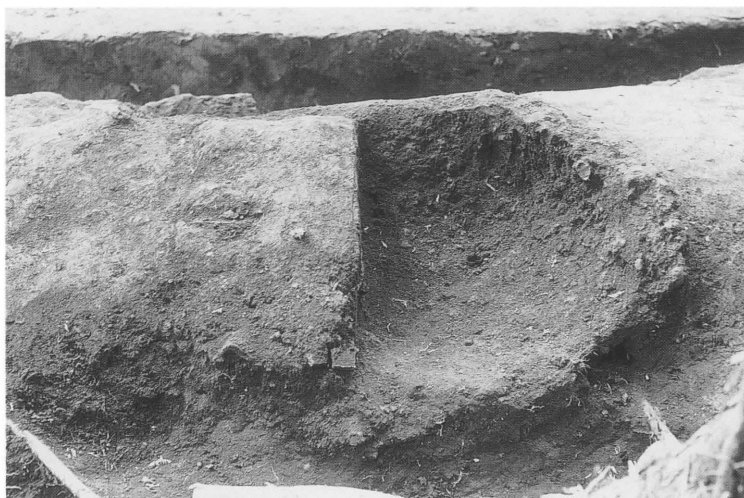
2. 第2号窯跡燃烧部
及び第5号窯跡灰原内土坑
(西から)



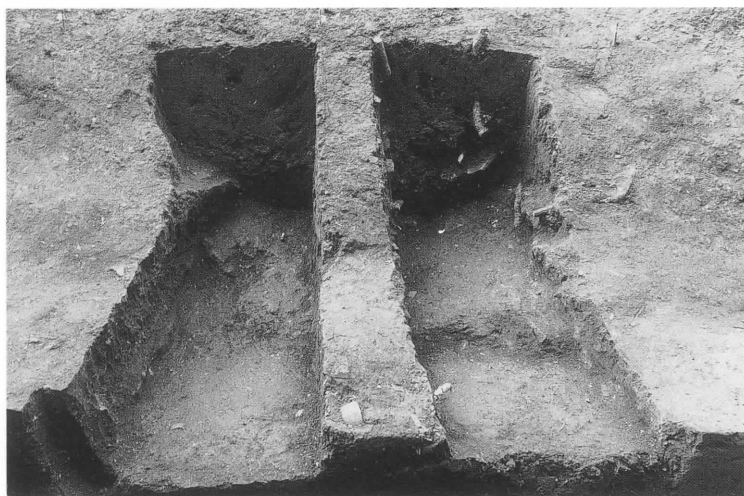
3. 第2号窯跡試掘坑
遺物出土状況
(南から)



1. 第4号窯跡焼成部
(南から)



2. 第3・6号窯跡
(南から)



3. 第3・6号窯跡
土層断面
(南西から)





4-2



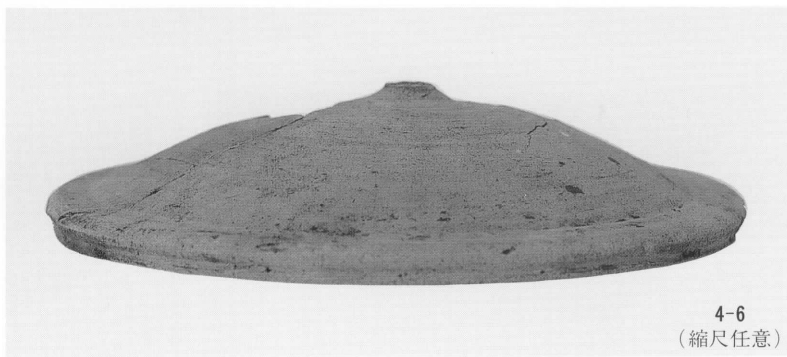
5-4



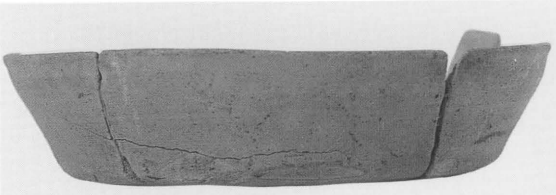
4-3



直-14
(縮尺任意)



4-6
(縮尺任意)



灰-4



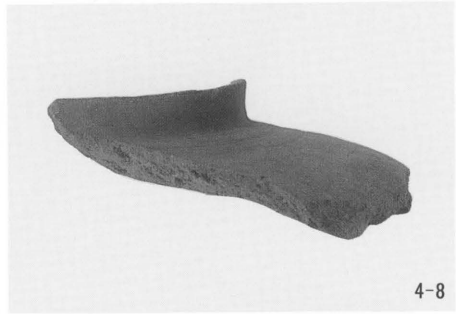
直-9



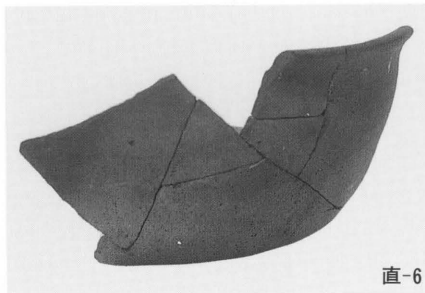
直-3



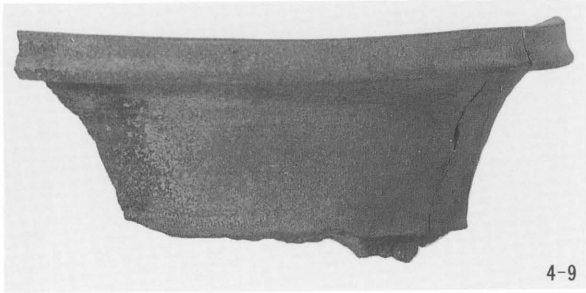
直-5



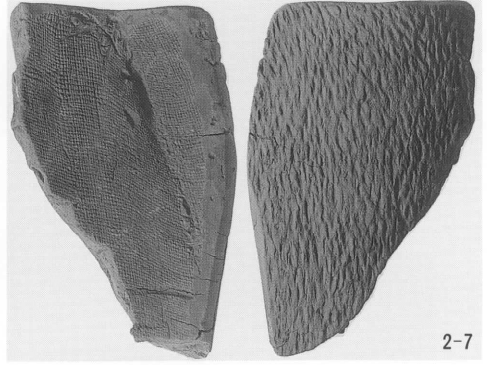
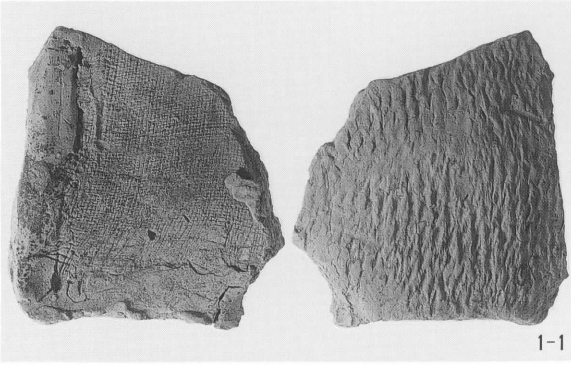
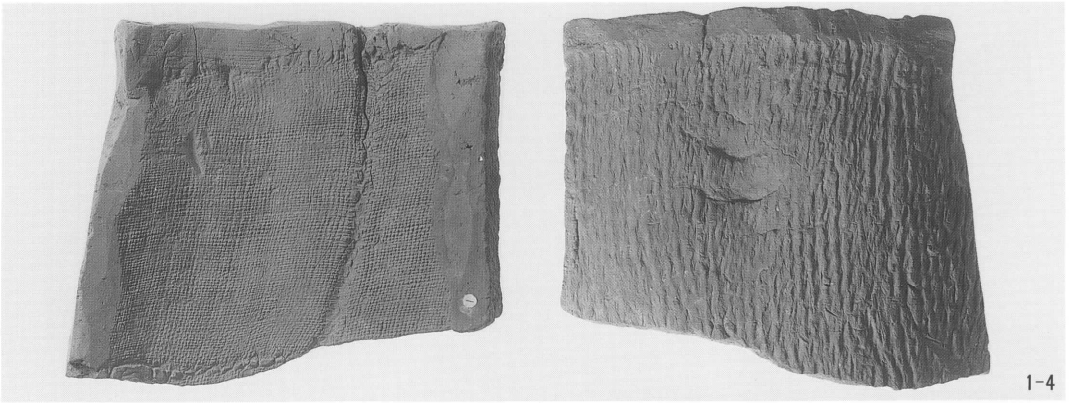
4-8

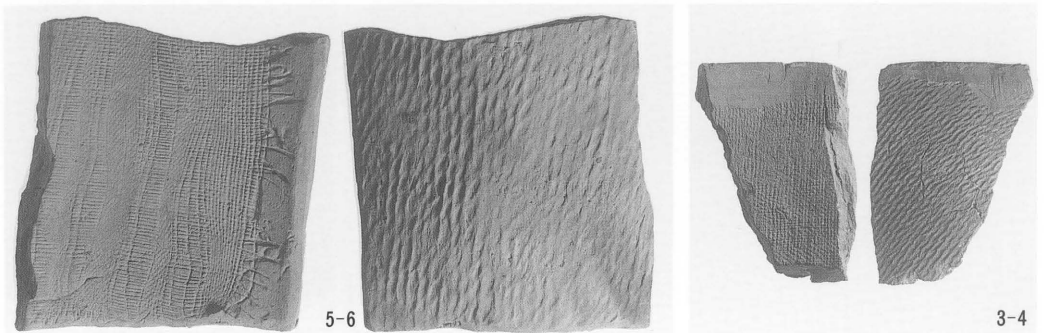
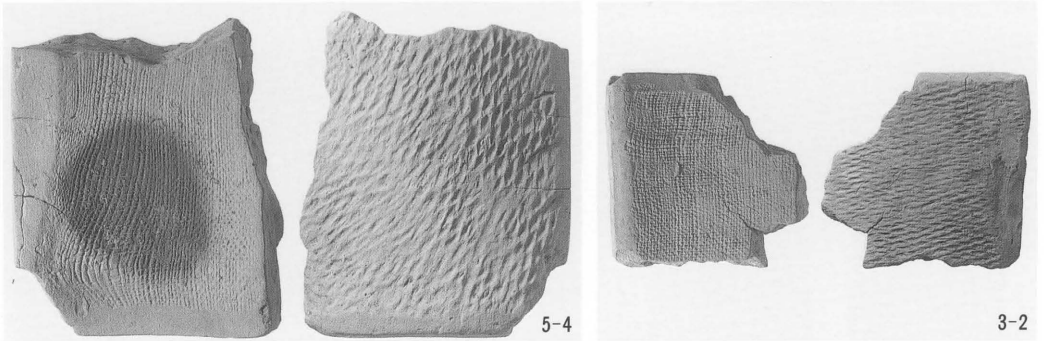
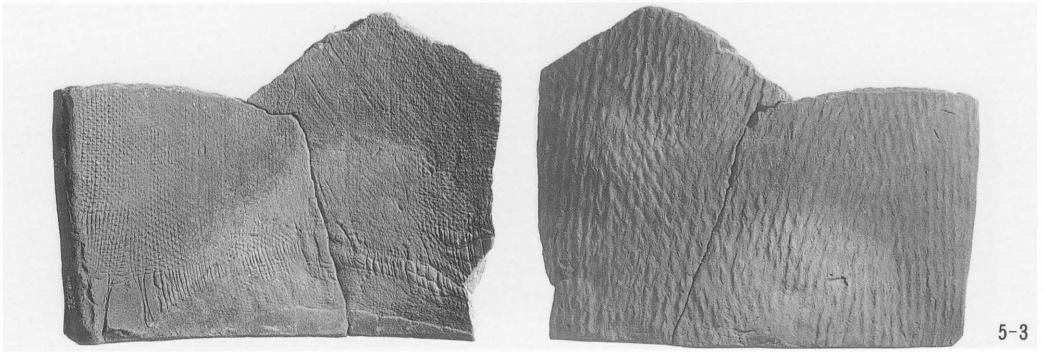
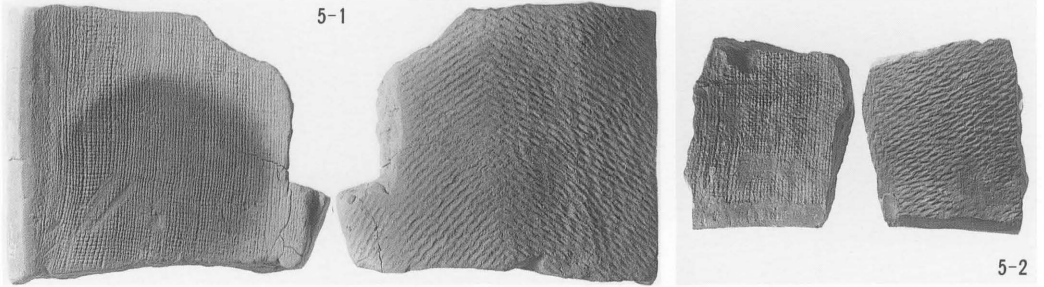
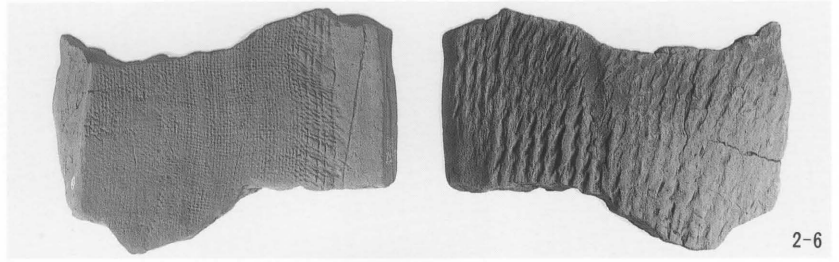


直-6



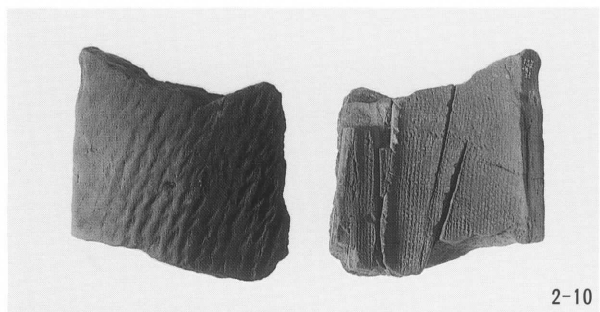
4-9



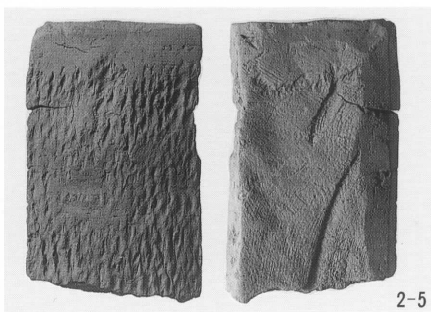




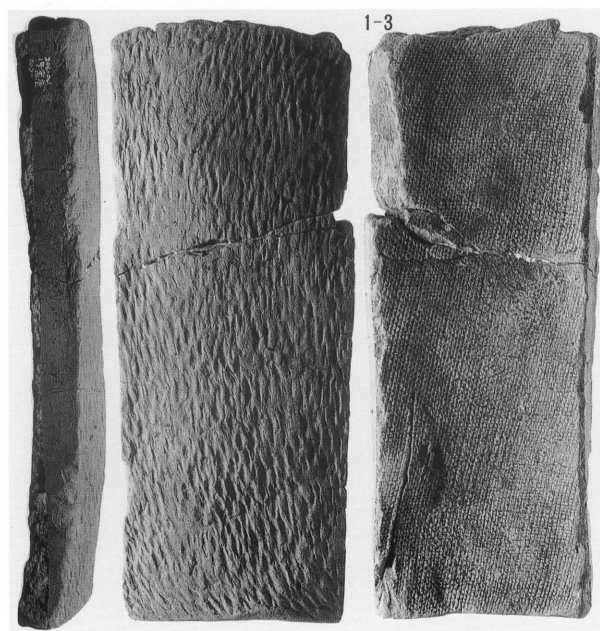
6-1



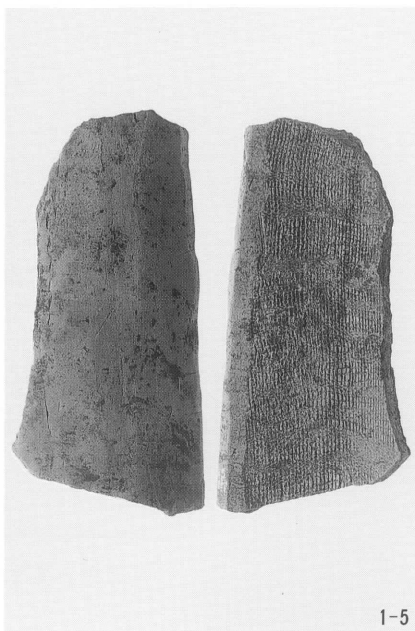
2-10



2-5



1-3



1-5

千葉県文化財センター調査報告第168集
木更津市上名ヶ谷窯跡確認調査報告書

平成元年3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。